

シンポジウム

主体的・探究的な学びの 体験が育むライフキャリア

—東大附属中等教育学校での学びの実践—

報告書

2019年1月13日

於 東京大学 弥生講堂 一条ホール

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

シンポジウム

主体的・探究的な学びの 体験が育むライフキャリア

—東大附属中等教育学校での学びの実践—

報告書

2020年1月13日

於 東京大学 弥生講堂 一条ホール

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

目 次

シンポジウム：主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリア

—東大附属中等教育学校での学びの実践—

趣旨説明.....山本 義春 2

挨拶秋田 喜代美・勝野 正章 2

プロジェクト紹介.....川本 哲也 4

話題提供

卒業生からみた東大附属の教育と卒後のキャリア 水落 清 10

卒業生からみた東大附属の教育と卒後のキャリア..... 長谷 亮二 15

卒業生からみた東大附属の教育と卒後のキャリア 林 紅 19

卒業生からみた東大附属の教育と卒後のキャリア..... 本間 達也 24

質疑応答..... 25

主体的・探究的な学びと卒後の学びや仕事との関連..... 天井 響子 29

卒業生調査の結果から見た東大附属卒業生のキャリア 荒木 真歩・田垣内 義浩 36

質疑応答..... 45

コメント山本 奈緒子・清野 堯明 46

指定討論

どのような学びが必要なのか..... 辰巳 哲子 49

主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリアシンポをお聞きして..... 白水 始 53

討論..... 60

閉会の挨拶..... 中村 高康 62

シンポジウム「主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリア —東大附属中等教育学校での学びの実践—」

2020年1月13日（月・祝）13:00～16:30

東京大学 弥生講堂 一条ホール

趣旨説明

山本 義春（教育学研究科教授）

東京大学は現在、第3期中期計画の後半に入ったところです。附属中等教育学校も同様に、附属学校の中期計画の中では、主体的・探究的な学びの効果に関する在校生・卒業生のデータを収集・解析・蓄積しながら検証していくということをうたっています。これを受けて、教育学研究科でも、平成29年度から学校教育高度化・効果検証センターにおいて、附属中等教育学校の在校生・卒業生を対象とした大規模調査を実施しています。

本日のシンポジウムは、その成果発表ということで、附属学校の卒業生が在学中に体験した主体的・探究的な学びが、卒後の彼ら・彼女らのキャリアにいかにつながっているかを卒業生自身の言葉で振り返っていただくとともに、平成30年度に実施した卒業生の全数調査のデータを定量的に分析した結果を発表することを目的としています。ご来場の皆さんの忌憚なきご意見、コメントを頂戴し、中期計画のまとめへと進みたいと考えています。

挨拶

秋田 喜代美（教育学部・教育学研究科研究科長）

弥生講堂一条ホールは、2000年に農学部の125周年を祝い、21世紀の新たな農学を語る場として建てられたものです。それから20年後、教育学部が21世紀、22世紀の研究・教育の在り方を共にこの場で語れることを大変嬉しく思います。

農学部は144年目になりますが、教育学部は本年度に70周年を迎えて昨年10月に記念式典と祝賀会を執り行いました。ところが附属中等教育学校は、

その前年に既に70周年を迎え、今年で71年目です。教育学部が発足したときから基礎研究と実践研究の融合が目指され、附属中等教育学校と教育学部は協働し、歩みを進めてきたこととなります。

この6年間は、教育における実践・実証のプロフェッショナルの育成に取り組んできました。附属学校も取り組んでくださり、卒業生がそうしたプロフェッショナルとして育っているかという検証に今回のプロジェクトはつながるものであると思っています。また、このプロジェクトは教育学部だけではなく、高大接続研究開発センター、医学系研究科、経済学研究科、総合文化研究科、情報学環、社会科学研究所という6部局の連携の下で行う学際的なプロジェクトと言えます。

人生100年時代において、学校の中だけの知ではなく、生活や社会まで幅を広げたライフワイドでライフロングな教育の在り方が問われています。そして、それがテスト学力だけではなく、個人および社会のウェルビーイングにいかに関与するのかが問われてきていると考えられます。

東京大学教育学部は、70年、附属学校71年の歴史の中で三つの宝物を持っています。一つは、教育の質の蓄積です。質の高い教育をし、5200名近くの卒業生を附属中等教育学校から輩出してきました。その質の高さは、毎年卒業研究で数々の賞を受賞していることにも表れており、本年度の第63回全国学芸サイエンスコンクールの人文社会科学部門でも文部科学大臣賞を受賞しました。

二つ目の宝物は、データのアーカイブです。教育学部では、先生方の尽力により、発足以来の教育評定や1980年代からの卒業研究の要旨等、さまざまなデータが蓄積されています。

三つ目の宝物は、新進気鋭の若手研究者と、それ

を指導する専任の先生方の協力により、新たな知見を基にした新たな学術の成果のデータ解析ができることです。

本日は、附属学校の教育を受けた卒業生の生の声が聞けるということで、中等教育や高等教育を越えた生涯の教育として私たちがどういう教育を担っていけばよいかという熱い議論ができればと思っています。この会場のフロアの皆さまにも、一人一人主体的・探究的にご意見を言っていただき、対話が深まることを心から期待して、開会の挨拶とさせていただきます。

勝野 正章（教育学部附属中等教育学校校長・教育学研究科教授）

附属中等教育学校にいて感じるのは、生徒の個性です。非常に個性的な生徒がたくさんいて、その個性をさらに伸ばすような教育活動が本校では行われています。在校時に充実した学習や学校生活ができるだけではなく、その学びや学校生活が将来どのように生かされていくかも学校としては忘れてはならないことだと思います。

生徒たちが本校で過ごす時間は人生の中で本当に短いですが、この子たちがこれからどのように活躍するのか、目立った活躍でなくてもそれぞれの人生を豊かに送ってくれるだろうかと思いながら、日々、生徒たちに接しています。今日は、本校で学び、学校生活を送り、その後、社会に出てさまざまな分野で活躍している卒業生の皆さんの話をじかに聞けるということで大変楽しみにしています。それを研究的・学問的に分析していくという報告も頂けるということで、皆さんと一緒に楽しく学んでいきたいと思っていますので、今日はどうぞよろしく願いいたします。

プロジェクト紹介

「東大附属・CASEERによる在校生パネル調査・卒業生調査」

川本 哲也 (CASEER 特任助教)

1. はじめに

今日は、東大附属中等教育学校ならびに学校教育高度化・効果検証センター (CASEER) が協力して行っている在校生パネル調査・卒業生調査においてこれまで分かってきたことと、これから明らかにしていくことをご紹介します (Slide 1)。本報告のポイントは、東大附属およびCASEERについての簡単な紹介と、パネル調査の目的、分析結果の現状、今後の展望の4点です (Slide 2)。

学校教育高度化・効果検証センターシンポジウム
主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリア
—東大附属中等教育学校での学びの実践—

2020年1月13日
@弥生講堂 一乗ホール

**東大附属・CASEERによる
在校生パネル調査・卒業生調査**

CASEER特任助教 川本哲也
tk5049@p.u-tokyo.ac.jp

Slide 1

本報告の内容

- ① 東大附属中等教育学校およびCASEERについて
- ② 東大附属パネル調査の目的
- ③ 東大附属パネル調査のデータ分析結果の現状
- ④ 東大附属パネル調査の今後の予定と卒業生全数調査について

Slide 2

① 東大附属中等教育学校およびCASEERについて

2. 東大附属中等教育学校およびCASEERについて

在校生パネル調査ならびに卒業生調査は、東大附属とCASEERの二つのセクションが協働し、対等な関係で行っている調査です (Slide 3)。

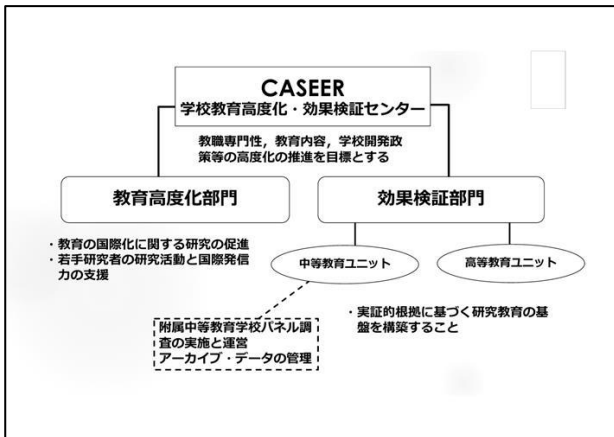
パネル調査の実施・運営

- ▶ 東京大学教育学部附属中等教育学校
研究と実践の連携の場、学部と附属の共同研究拠点
- ▶ 東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター (The Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research)

CASEER

Slide 3

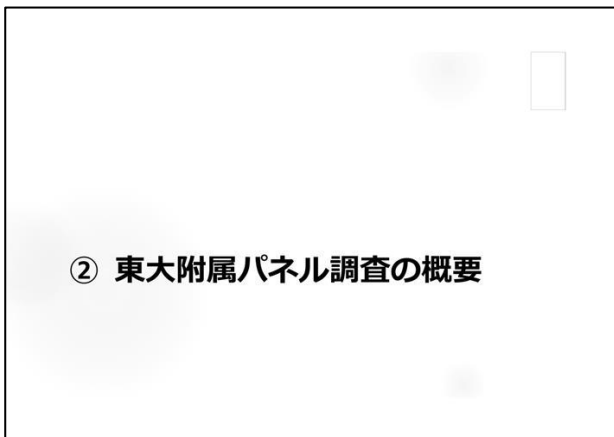
CASEERは、できてからまだ3年の非常に新しいセンターです。内部構造は、教育高度化部門と効果検証部門の大きく二つに分かれています (Slide 4)。今日のシンポジウムは、効果検証部門の中の、特に中等教育学校を対象としている中等教育ユニットが管轄で行っているシンポジウムです。このユニットは、附属学校で行われているパネル調査の実施・運営や、アーカイブデータの管理を行っているセクションです。



Slide 4

3. 東大附属パネル調査の概要

パネル調査の概要についてご紹介します (Slide 5)。東大附属パネル調査の目的は、附属学校の教育の特色でありシンポジウムのタイトルにもなっている「主体的・探究的な学び」をキーワードに、附属学校の中で行われている総合学習によって実現される主体的・探究的な学びが、附属学校ならではの教育効果として卒業生のその後の人生にどのような影響を及ぼしているかを実証的に検証することです (Slide 6)。



② 東大附属パネル調査の概要

Slide 5

東大附属パネル調査の目的


▶ 附属教育の特色：主体的・探究的な学び

数十年来の「卒業研究」を含む、
系統的な「総合学習」の伝統

- ・総合学習入門 (1, 2年)
- ・課題別学習 (3, 4年)
- ・卒業研究 (5, 6年)

▶ 主体的・探究的な学びを中心とした附属教育の効果検証の必要性

「探究性」「協働性」「市民性」の育成はいかにして可能か？



Slide 6

パネル調査の射程は大きく二つです (Slide 7)。一つは、現在進行形で東大附属で学んでいる在校生を対象としたパネル調査です。これは、主体的・探究的な学びが在校生の今の価値観や意識に及ぼしている効果と、家庭の中で一緒に過ごす保護者との関わりを明らかにすることを目的に 2016 年度より開始された調査です。

東大附属パネル調査の射程

▶ 在校生パネル調査

- ⇒ 主体的・探究的な学びは在校生の価値観や意識、適性などに対しどのような発達の効果があるか？
- ⇒ 主体的・探究的な学びの効果は保護者の教育観といかに関わるか？

▶ 卒業生全数調査・卒業生パネル調査

- ⇒ 主体的・探究的な学びは大学での学びにどのような影響を与えるか？
- ⇒ 主体的・探究的な学びは社会に出た後のどのような社会的アウトカムに影響するか？

Slide 7

もう一つは、今日のメインである、卒業生全数調査・卒業生パネル調査です。これは、主体的・探究的な学びが進学先の大学での学びにどのような影響を与えているか、また、社会に出た後のどのような社会的アウトカムに影響するかを実証的に研究するための調査です。

東大附属で蓄積されてきた貴重なデータは、電子化・アーカイブ化されています (Slide 8)。そのデータと連結することで、どのような生徒に主体的・探究的な学びが効果的であるかを検証することも可能です。在校生調査、卒業生調査、アーカイブ化とい

う三つを鍵に、CASEERは東大附属と協力しながら、主体的・探究的学びの効果を検討していることとなります。

東大附属パネル調査の射程

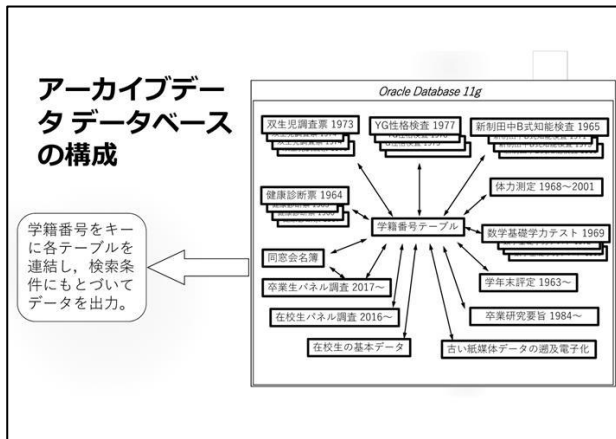
▶ 東大附属アーカイブデータとの連結

⇒ アーカイブデータと連結することで、どのような生徒に主体的・探究的な学びが効果的であるのか（または効果的でないのか）の検討が可能となる。

【注】
 なお、パネル調査のデータおよびデータベースに納められたデータは厳重に管理されており、部外者が勝手にアクセスすることはできません。また、データの利用には附属学校DB管理運営委員会の許可が必要です。

Slide 8

アーカイブデータは、在学中に行われる人格検査や知能検査、体力測定、健康診断、学力テスト、卒業研究要旨などを、学籍番号を鍵に連結し、電子化して保存するデータベースになっています(Slide 9)。現在どのようなものが入力されているかは、Slide10とSlide 11にまとめているので、適宜ご参照いただければと思います。



Slide 9

アーカイブデータ データベースの構成

▶ 東大附属アーカイブデータ

– すでにアーカイブ化されたアーカイブデータの概要

データ名	DB収録期間	現状	内容
双生児調査票	1973-2009	記録継続	AB児区分、家族、出産前後の状況、発育・発達状況、罹患履歴、行動、性格、社会性等
健康診断票	1964-2003	記録継続	身長、体重、胸囲、座高、視力（裸眼・矯正）、各種疾患・検査等
数学学力テスト	1969-2007		数学I標準学力テスト(72-89)、数学基礎学力テスト(69-07)
YG性格検査	1977-2009		D, C, I, N, O, Co, Ag, G, R, T, A, Sの12項目
新制田中B式知能検査	1965-2001		迷路、立方体等各課題の素点と換算点/知能点/知能偏差値/知能段階
体力測定	1968-2001	記録継続	各学年での走・投・跳・筋力・肺活量・敏捷性・柔軟性等

Slide 10

アーカイブデータ データベースの構成

▶ 東大附属アーカイブデータ

– 現在アーカイブ化が進行しているデータ

データ名	DB収録期間	現状	内容
在校生パネル調査	2016-	毎年実施	授業への取り組み、総合的な学習について、学習方法・意欲、環境等。保護者も調査。
卒業生全数調査・卒業生パネル調査	2017-	DB化中記録継続	在校時の学習の効果検証
学年末評定	1963-2014	DB化中記録継続	卒業研究を含む全科目の年度末評定（5段階）
卒業研究要旨	1984-2014	DB化中記録継続	標題と本文（800～1500字程度）

Slide 11

③ 東大附属パネル調査のデータ分析結果の現状

4. 東大附属パネル調査のデータ分析結果の現状

これまでに報告された研究結果が、教育学研究科の紀要や学術誌等に掲載されはじめています。今日はその中の幾つかをピックアップしてご紹介します。

Slide 12は、教育学研究科の本田先生の研究で明らかになってきた、東大附属の在校生の特徴です。日本の一般的な中高生と比べると、生徒たちの探究性

が非常に強く、職業に対する具体的な展望をより明確に持っていて、黒板を見ながら一方向的に行う伝統的な教授のスタイルに対しては消極的という特徴が明らかになっています。

これまでに報告された研究結果例①

▶ 東大附属在校生の特徴

- 東大附属在校生は日本の一般的な中高生と比べ・・・
 - ・ 「探究性」への志向が強い
 - ・ 職業に関する展望をより明確に持っている
 - ・ 伝統的な教授方法を用いた授業に対し消極的などの特徴がある。

本田由紀 (2019). 「探究性」「市民性」「協働性」に関する東大附属中等教育学校生の特徴：在校生調査と他の調査との比較を通じて. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 58, 201-215.

Slide 12

続いては、私が当センターの紀要に書いたものです (Slide 13)。東大附属の在校生は、日本の一般的な中高生と比べると、学習に対する好奇心が下がっていかないという特徴があります。一般的な日本の中高生は、学習に対する興味が年々下がっていく傾向にあります。附属の子たちは上がっていくか、少なくとも下がらないということが分かってきています。これも主体的・探究的学びの効果の一つと言えると思います。

これまでに報告された研究結果例②

▶ 東大附属在校生の特徴

- 東大附属在校生は・・・
 - ・ 高学年の生徒ほど文化や自然に対する興味・関心が高い
 - ・ 数学に対する興味・関心は学年による差が見られないなどの特徴がある。

川本哲也・日高一郎・梅原章太郎 (2019). 青年の学習内容に対する興味における年齢差と性差：都内中等教育学校におけるパネル調査のベースラインデータから. *東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要*, 4, 92-106.

Slide 13

Slide 14 は、昨年度、教育学研究科の博士課程に在籍していた黒宮さんの研究です。テキストマイニングを用いて、どのようなトピックに焦点を当てた卒業研究要旨が書かれているのかという経年変化を検討したものです。その結果、附属内では「調査」「体

験活動」「地方行政」などのトピックを扱う研究が年々増加しており、逆に「人文学」「世界史」「感想」などのトピックを扱う研究は減ってきていることが分かりました。このようなデータから、附属内での卒業研究に対する指導がどのように変化してきているかを明らかにする研究も行われています。

これまでに報告された研究結果例③

▶ 東大附属の卒業研究

- 東大附属で行われる卒業研究 (研究型アクティブラーニング) で扱われるトピックの変化
 - ・ 「調査」「体験活動」「地方行政」が経年で増加する傾向
 - ・ 「感想」「人文学」「世界史」が経年で減少する傾向
 - ・ 東大附属の卒業研究において研究の実証性が求められるようになってきたことを示唆

黒宮寛之・日高一郎・山本義春 (2019). トピックモデルによる研究型アクティブラーニングの分析. *日本教育工学会論文誌*, 42, 323-330.

Slide 14

Slide 15 は、昨年度、当センターの紀要に喜入研究員が書いたものです。附属卒業生は、一般的な日本の成人に比べて、進学先・就業先でのさまざまな取り組みに積極的に関与している傾向が強いことが分かりました。また、東大附属における総合学習が、その積極的な関与を高めている可能性を示唆する結果を卒業生調査から明らかにしています。これが本日の話題提供において、より詳細な形で明らかになりますので、ご期待いただければと思います。

これまでに報告された研究結果例④

▶ 東大附属卒業生の特徴

- 東大附属の卒業生は・・・
 - ・ 進学先、就業先での様々な取り組みに積極的に関与
 - ✓ 学業、日常生活への熱心な取り組み
 - ✓ 就業先でのやりがい、自己向上のための転職
 - ・ 東大附属の総合学習は、積極的な関与をより高める可能性

⇒ 本日の話題提供にて、より詳細な結果が明らかに

喜入 暁 (2019). 東大附属中等教育学校卒業生の特徴：「学びと仕事の東大附属卒業生調査」から浮かび上がる卒業生の姿. *東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要*, 4, 107-126.

Slide 15

5. 東大附属パネル調査の今後の予定と卒業生全数調

査について

卒業生調査についてご説明します (Slide 16)。CASEER と東大附属が共同で行っているこの調査は、在校生パネルと卒業生全数調査・卒業生パネル調査の二つに分かれます (Slide 17)。在校生パネルは平成 28 年度、平成 29 年度、平成 30 年度と実施されてきて、令和元年度以降も継続して実施される予定です。

④ 東大附属パネル調査の今後の予定と卒業生全数調査について

Slide 16

東大附属パネル調査スケジュール概要

	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	...
在校生パネル調査 (保護者調査含む)	済	済	済	実施 予定	○	○	○	○	○	○	○	...
卒業生全数調査・ 卒業生パネル調査			済 (全数)				○ (一部 実施)				○ (一部 実施)	...

本日の話題提供にて詳細に扱う、
「学びと仕事の東大附属卒業生調査」

Slide 17

それに対して、卒業生全数調査・卒業生パネル調査は、平成 29 年度に全数調査が 1 度実施され、次は令和 3 年度からパネル調査が 5 年間隔で行われていく予定です。今日は、平成 29 年度に行われた全数調査に「学びと仕事の東大附属卒業生調査」という名称を付けて、これを定量的に分析した結果をご紹介します。

どのような調査だったかという点、教育学、心理学、社会学、経済学など、さまざまな分野を横断する学際的研究としての特徴を持った調査です。Slide 18 のようなオリジナルのピラも作りしました。

学びと仕事の東大附属卒業生調査の概要

▶ 東大附属の卒業生全員を対象とした調査

- 東大附属の卒業生が在学時に経験した主体的・探究的な学びが、その後のキャリアにどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした調査
- 教育学・心理学・社会学・経済学を横断する学際的研究としての特徴

Slide 18

2017 年度末に、郵送法と Web 上での回答を併用する形で 5163 名の卒業生に調査票セットを送りました (Slide 19)。そのうち宛先不明等を除いて 2310 名 (紙 1662 名、Web 648 名) から有効回答を得ています。回答率は約 45% です。今日のシンポジウムの話題提供の中では、このデータを基にご発表を頂きます。具体的な調査票の内容について関心のある方は、Slide 20 をご一読いただければと思います。

学びと仕事の東大附属卒業生調査の概要

▶ 東大附属の卒業生全員を対象とした調査

- 2017 年度末 (2018 年 3 月) に実施
- 郵送法と Web 上での回答を併用
- 卒業生のべ 5163 名に調査票セットを郵送 (2018 年 2 月下旬)

↓

うち宛先不明・死去 68 件
有効回答者数 2310 名 (約 45%)
・紙調査票 = 1662 名
・Web 調査票 = 648 名

Slide 19

学びと仕事の東大附属卒業生調査の概要

▶ 調査票の内容

- 東大附属在学時の学びの経験
- 現在の意識や価値観、人格
- 東大附属卒業後の進路
- (大学等進学者のみ) 進学先での学びの経験
- (東大附属・大学等卒業後に就職した者のみ) 就職先の職種や雇用形態
- 現在の就業先の職種・雇用形態
- その他、人口統計学的指標

Slide 20

6. 本日の話題提供

後半の話題提供で、天井先生や荒木先生たちから、「学びと仕事の東大附属卒業生調査」のデータの定量的分析結果をご発表いただきます (Slide 21)。それに先立ち、4名の卒業生から、東大附属での主体的・探究的学びと現在の仕事の関連について、当事者目線でお話いただくことになっています。質と量の観点から主体的・探究的な学びの卒後への効果を明らかにしていこうと思っていますので、最後までお付き合いいただければと思います。

本日の話題提供

- ▶ 卒業生から見た東大附属の教育と卒後のキャリア
 - ・ 水落 清 (1992年卒業生)
 - ・ 長谷亮二 (1992年卒業生)
 - ・ 林 紅 (2008年卒業生)
 - ・ 本間達也 (2010年卒業生)
- ▶ 主体的・探究的学びと卒後の学びや仕事との関連
 - ・ 天井 罌子 (CASEER特任研究員・教育学研究科博士課程)
- ▶ 卒業生調査の結果から見た東大附属卒業生のキャリア
 - ・ 荒木真歩 (教育学研究科修士課程)
 - ・ 田垣内義浩 (教育学研究科修士課程)

卒業生の方々が振り返る、東大附属での学びと現在の仕事に関する生の声

学びと仕事の東大附属卒業生調査データを利用した実証的分析結果

Slide 21

最後に、本調査においては、附属学校の在校生、卒業生、保護者の皆さまに多大なご協力を頂いています。この場を借りて深く感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます (Slide 22)。これで私の発表を終わらせていただきます。

東大附属中等教育学校 (旧・東大附属中・高等学校) の在校生・卒業生およびその保護者の皆さまのご協力に深く感謝申し上げます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

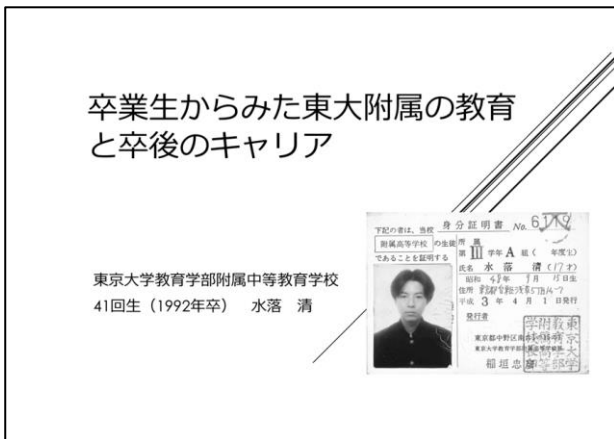
Slide 22

話題提供

「卒業生からみた東大附属の教育と卒後のキャリア」
水落 清 (1992 年卒業生)

1. はじめに

東大附属の 41 回生の水落と申します。よろしくお願ひします。当時は Slide1 のように手書きの身分証明書でした。今はどうなっているか知りませんが、こういう感じで 6 年間に過ごしました。



Slide 1

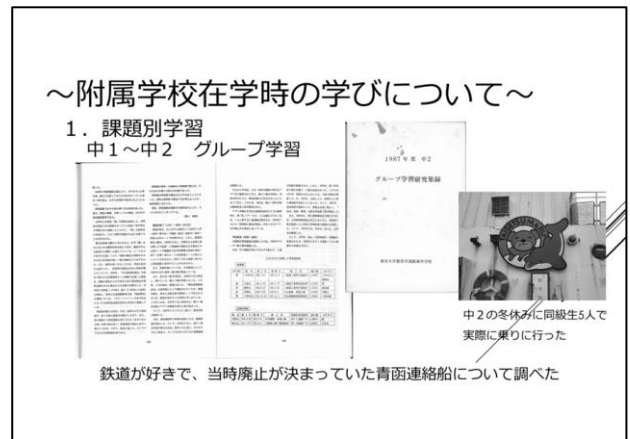
現在、私は東京都台東区浅草で建築工事業を営んでいます。主に官公庁の公共建築工事を受注しています。Slide 2 に写っているのは公衆トイレです。各省庁に登録して公共工事を行っています。文部科学省にも登録しているので、チャンスがあれば東大附属校舎の改修工事等もできたらいいと密かに狙っているところです。私は 46 歳ですが、39 歳のときに父から会社を引き継ぎ、社長になって今年で 7 年目になります。



Slide 2

2. 附属学校在学時の学びについて

早速、附属学校在校時の学びについてお話しします。まず、課題別学習ということで、中学校 1~2 年生でグループ学習をしました。Slide 3 は当時の研究録です。鉄道が好きで、当時、廃止が決まっていた青函連絡船について調べました。中学校 2 年生の冬休みには附属の友達と実際に乗りに行きました。これは私の中でも本当に大きな経験でした。



Slide 3

中 3~高 1 ではテーマ学習がありました (Slide 4)。私はほとんど覚えていないのですが、LINE で同級生 40~50 人に聞いてみたところ、「関数電卓をやっていた人がいたよ」と言われて、自分が関数電卓をヨドバシカメラで買ったことを思い出しました。随分長持ちしたのですが、半年ほど前に壊れてしまい、今日は持ってくるできませんでした。H 先生が担当で関数電卓の授業をして、地学教室ですごく細かいプリントで計算したことは覚えていますが、それ以外はほとんど覚えていません。

～附属学校在学時の学びについて～

1. 課題別学習
中3～高1 テーマ学習

ほとんど覚えていない!!!

しかし、これではまずいと思い、
同級生LINEで聞いてみたところ・・・

「関数電卓をやった人がいたよ!」

おお! そうだ、俺、関数電卓買った!
けど。。。覚えているのは地学教室とH先生とプリントと・・・

Slide 4

高2～高3では卒業研究をしました (Slide 5)。高2でテーマを設定したときは原発について研究しようと思いました。私が入学した年の1986年にチェルノブイリ原子力発電所事故があり、当時は原発の是非がかなり問われていました。『東京に原発を』という本に感化されて研究しようとしたのですが、これが難しく全然進まず、困ったと思っていたときにチャンスが到来しました。担当していた教官が異動したのです。それで高3になって書店で別のテーマを考えていたときに、酸性雨の検査キットというのが目に入りました。面白そうだと思い、「日本における酸性雨の状況」というテーマで、実際に雨を採取して酸性度を調べて要旨集にまとめました。

～附属学校在学時の学びについて～

1. 課題別学習
高2～高3 卒業研究
高2 研究テーマ設定時

「原発について」

当時読んでいた本に感化された
・・・難しい、全然進まない

☆チャンス到来!!! ☆

担当教官が異動! ?

高3 書店で酸性雨検査キットを発見!

「日本における酸性雨の状況」



Slide 5

その他、生活面において私の人格形成に大きな影響を与えたと思われる経験は何かというと、銀杏祭です。当時、私は銀杏祭実行委員の副委員長をしました。Slide 6は後夜祭の写真です。すごく楽しくて、このときの記憶は鮮明に覚えています。玄関を入っ

て真正面にある中庭に簡易的なリングを作り、プロレス好きの友達とプロレスをして、すごく盛り上がりました。私はレフェリー役でした。

～附属学校在学時の学びについて～

2. その他の学習

(私の人格形成に大きな影響を与えたと思われる学習)

銀杏祭



銀杏祭実行委員会副委員長

Slide 6

この銀杏祭で勉強になったのは、全ては政治力がものを言うということです (Slide 7)。やることもやらずに権利ばかり主張することは通用しないということを理解しました。というのも、当時の私はやさぐれていて、先生に反抗するような生徒だったので。一方、銀杏祭の実行委員長はとても優秀で、帰国子女で英語がぺらぺらで、私とは正反対にいる生徒でした。彼が実行委員を選ぶときに、「おまえの力が必要なんだ。頼む」と言われて、私は意気に感じて実行委員になりました。その中で気付いたのは、彼はすごく真面目なので、先生に話が通せるということです。実行委員の「こういうことをやりたい」という無理な願いも、彼を通すと許可が下りました。真面目な者は先生に話が通せる。そういうことがとても大事だということを銀杏祭で学びました。

～附属学校在学時の学びについて～

2. その他の学習

(私の人格形成に大きな影響を与えたと思われる学習)

銀杏祭

全ては政治力がものを言う

～やることもやらずに権利ばかり
主張することは通用しないんだ～

銀杏祭実行委員長

・「お前の力が必要なんだ。頼む」

・先生に話が通せる!!!



銀杏祭実行委員会副委員長

Slide 7

3. 学びが現在どのようにつながっているか

この学びのおかげで、私は、考え、調べ、結論を出せるようになったと思います(Slide 8)。そもそも、当時は自らテーマを決める学習だけでした。例えばファイナルコースというのが中2と高1のクラス替えの前にありましたが、私は高1のときにオリエンテーリング実行委員長になり、コースやレベル分け、施設などを生徒中心となって決めました。先生たちはあまり口出しをしませんでした。


～学びが現在どのようにつながっているか～

1. 考え、調べ、結論を出せるようになった

- ・そもそも、自らテーマを決める学習だけだったファイナルコース(中2、高1)
- ・高1の時にオリエンテーリング実行委員長。コース、レベル分け、施設など生徒中心となって運営
- ・宿泊研修(高1、高2)
- ・いずれも3コースずつ、ほぼ自分たちの希望で行けた。テーマもその場所に関するのならなんでも良かった
- ・スキー教室
- ・希望者のみ

学習を押しつけられたことがなかった!

考え、調べ、結論を出すことが身につけている実感



Slide 8

高1と高2の宿泊研修は、いずれも3コースずつあり、これも自分が行きたい所を選んで行きました。テーマも、その場所に関するものであれば何でもよかったです。私は高校2年生のときは岩手コースでしたが、なぜか車のナンバーを調べるというよく分からないことをテーマにした覚えがあります。スキー教室は希望者のみの参加でした。


とにかく、学習を押し付けられることがなかったというのが、とても良かったと思っています。

今の仕事にどうつながっているかという、会社でワーク・ライフ・バランスというのが話題になっていますから、台東区でワーク・ライフ・バランスの認定企業を取得したり、経済産業省が行っている健康経営優良法人の認定を受けたり、建設業ではワーク・ライフ・バランスがあまり重視されていない中で、いろいろと考えながら結論を出せていることに生きていると思います(Slide 9)。

～学びが現在どのようにつながっているか～

1. 考え、調べ、結論を出せるようになった

- ・ワーク・ライフ・バランス等への取組



台東区ワーク・ライフ・バランス推進企業認定 | 経済産業省「健康経営優良法人2019」 | 健康優良企業認定

Slide 9

学び続ける姿勢も身に付いたと思います(Slide 10)。私は中学・高校時代は勉強をあまりしなかったのですが、ただ、学ぶことに対する抵抗感はとてもなく、好奇心がかなり強いのだと思います。私は文系出身で、建築の勉強は全然していませんでしたが、建築施工管理技士を取ったり、資格を通じて苦手だった数的処理を勉強したりするようになりました。資格を取ったことで、結果的に話も通じやすくなったと思います。

～学びが現在どのようにつながっているか～

2. 学び続ける姿勢が身につけている

- ・学ぶことに対する抵抗感が少ない=好奇心の充実

各種資格の取得

1級建築施工管理技士、宅地建物取引士等


資格取得を通して、苦手だった数的な考え方も身についた(ハタタリも効くように...)

学び続ける姿勢の持続

経営者は傲慢になりがち。そして誰も教えてくれない。社長になった当初は右も左も分からなかったが、自らセミナーを探し、現在でも継続して学んでいる。そこで多くの気付きを得られている。

確実に附属の学びは経営に活着していると実感

ただ、たまに色々な事に出すすぎて、苦しくなることも...



Slide 10

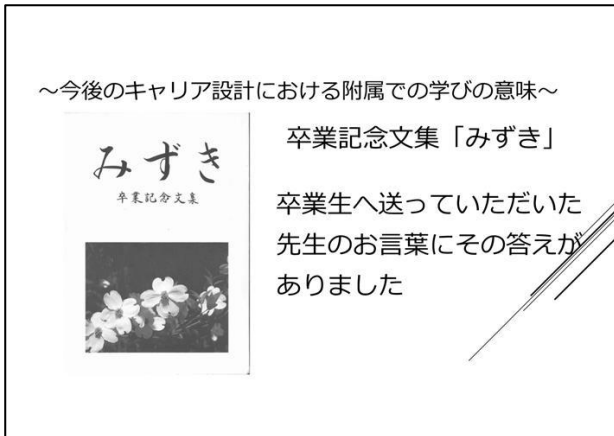
あとは、学び続ける姿勢が持続していると思います。私の会社は小さいのですが、経営者というのは傲慢になってしまうもので、その傲慢さを抑えるという意味では、やはり学び続けることが必要だと思います。右も左も分からない中で、経営について今でも継続して学んでいます。

附属の学びは、今の仕事に確実に生きていますと実感しています。ただ、いろいろなことに手を出し過ぎて、たまに苦しくなることもあるので、その辺は

抑えていこうと思っています。

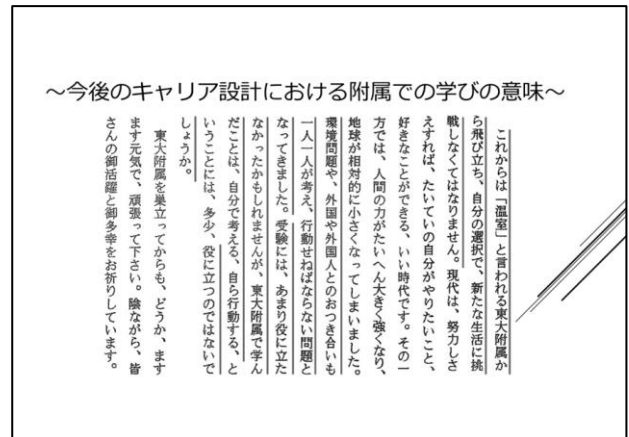
4. 今後のキャリア設計における附属での学びの意味

今後のキャリア設計における附属での学びの意味は、「みずき」という卒業文集に1~2年生のときの担任の先生方が書いてくれた言葉に、その答えがありました (Slide 11)。



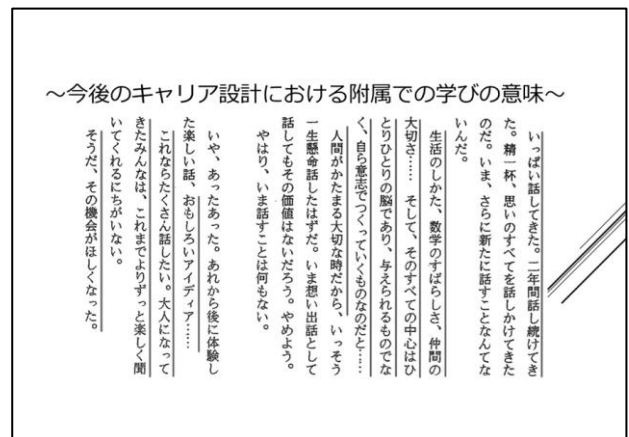
Slide 11

ある先生が「これからは『温室』と言われる東大附属から飛び立ち、自分の選択で、新たな生活に挑戦しなくてはなりません。環境問題や、外国や外国人との付き合いも一人一人が考え、行動せねばならない問題となってきました。受験にはあまり役に立たなかったかもしれませんが、東大附属で学んだことは、自分で考える、自ら行動するということには多少、役に立つのではないのでしょうか」と書いていました (Slide 12)。約28年前に、グローバル化している今の時代を予見しているかのような文章を先生は書いていました。受験勉強も学校ではほとんどなかったと思いますが、46歳になった今、自分で考えて行動するという事は、とても身に付いていると考えています。



Slide 12

私の中1、中2のときの担任の先生は、「いっぱい話してきた。2年間話し続けてきた。生活のしかた、数学の素晴らしさ、仲間の大切さ、そして、その全ての中心はひとりひとりの脳であり、与えられるものでなく、自らの意志でつくっていくものなのだと、人間がかたまる大切な時だから、いっそう一生懸命話したはずだ」と書いていました (Slide 13)。この先生は本当にいろいろなことを話す先生でした。「14歳で人格が決まるから、この2年間は君たちにはとても大事な時間なのだ」と口酸っぱく言われて、よく怒られて、当時は本当に嫌だと思っていたのですが、今思えば、私の人格はそこで形づくられたのではないかと思います。



Slide 13

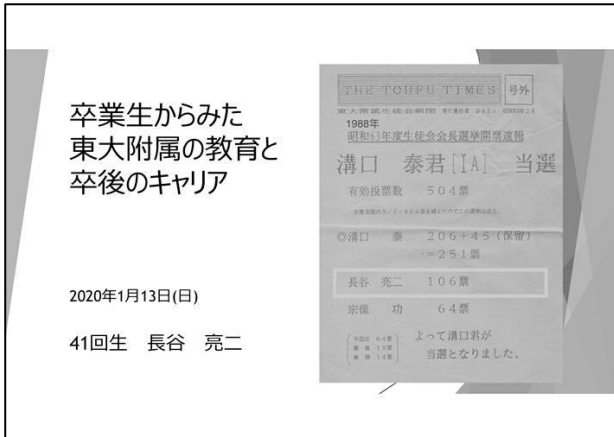
「いま話すことは何もない。いや、あった、あった。これならたくさん話したい。大人になってきたみんなは、これまでよりもずっと楽しく聞いてくれるにちがいない。そうだ、その機会がほしくなった」とも書いており、先生はまだ話し足りなかったのか

ということで、数年前に同窓会をしました。先生に来ていただいて、すごくありがたい話をさせていただきました。この話の内容については、次に話す長谷さんが話してくれると思います。以上で私の発表を終わります。

長谷 亮二 (1992 年卒業生)

1. はじめに

私は東大附属で前代未聞だと言われたことが二つあります。一つは、中学2年生のときに生徒会長選挙に立候補したことです。通常だと高校1年生の先輩方が立候補するのですが、中学2年生で立候補して、106票を獲得して2位になりました (Slide 1)。



Slide 1

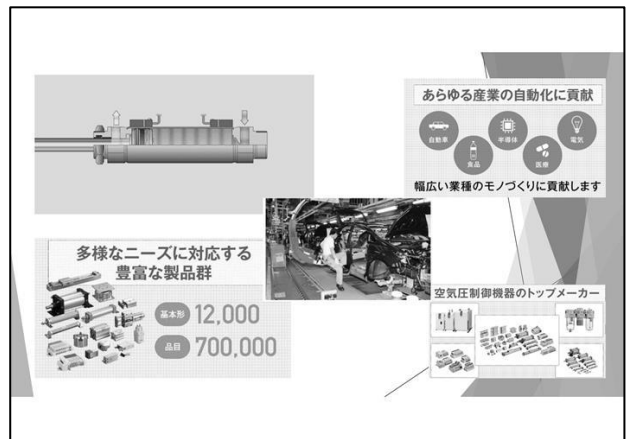
もう一つは、大きな声では言えないのですが、高校生のときに银杏祭が終わった後で、同級生20人ぐらいで、未成年が飲んではいけない液体を飲んでしまい、生徒会長でありながら3日ほど学校に行けなくなったことです。そういう黒い歴史があります。

2. 現在の仕事

現在、私は SMC 株式会社という空気圧機器メーカーに勤めています (Slide 2)。年商 6000 億円で、連結従業員は 2 万人です。空気圧機器というのは、圧縮された空気です。シリンダーの中のピストンロッドを上下運動させたり、回転運動させたりする機械部品です (Slide 3)。このような機械部品はさまざまな産業で活用されています。他にも、空気の流れを変えるバルブや、空気をきれいにするフィルターなども作っています。身近なところでは、ディズニーランドのイツ・ア・スモールワールドの中にあるロボットにも私たちの製品が使われています。



Slide 2



Slide 3

私はこの会社に 22 年勤めています。そのうちの 15 年はヨーロッパに勤務していました (Slide 4)。2000 年は、ヨーロッパの通貨統合の関係で、アムステルダムに駐在してファイナンス業務をしていました。その後は、ヨーロッパに中央倉庫をつくるということで、現地で土地や会社を買って新たなモノの流れを作る仕事に従事しました。

いったん日本に帰ってきて、輸出業務や海外のプロモーション業務などをして、再び 4 年間ヨーロッパに赴任しました。ドイツのフランクフルトでマーケティング活動や新製品開発などのお手伝いをし、昨年帰国しました (Slide 5)。

学んだ自ら学び報告することが実践できた場でありました。

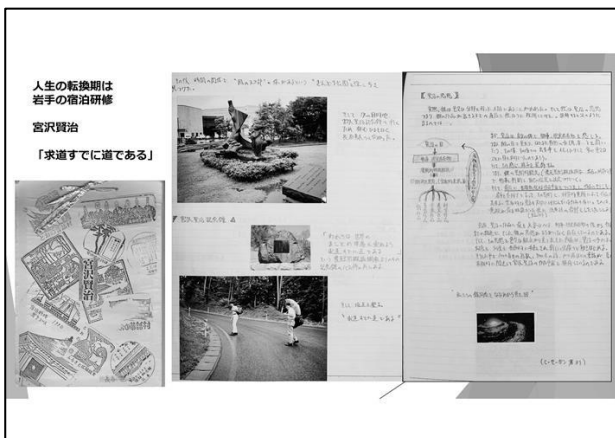


Slide 8

また、イギリスに自分で手紙を書き、1年間、スコットランドやウェールズなどへ留学しました。

4. 宿泊研修と宮沢賢治との出会い

私の人生の転換期は、高校時代に行った岩手での宿泊研修です (Slide 9)。そこで宮沢賢治との出会いがありました。宮沢賢治は作家として非常に有名ですが、農民の生活である農業と芸術を結ぶ活動をする芸術家でもありました。宮沢賢治は、「永久の未完成これ完成である。われらは世界のまことの幸福を索(たず)ねよう。求道すでに道である」ということを言っています。求める場所に至る過程にも既に価値があるという言葉は、私に非常に大きな影響を及ぼしました。



Slide 9

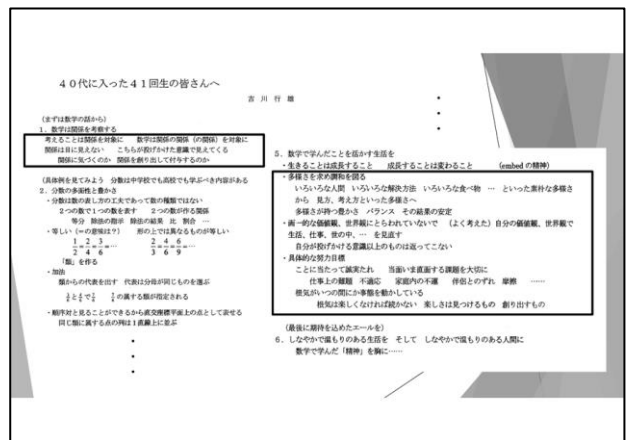
「求道すでに道である」という言葉には、私の息子も影響を受けていると思います。息子は高等専門

学校に2年通って中退し、当時、私が住んでいたドイツにやって来ました。彼はそこで国際バカロレアの資格を取得し、昨年、岡山大学に入学しました。文化人類学という30名ぐらいの新しい学部で、外国人に混ざって勉強しています。

彼は理系の高専に行っていたのですが、今は文化人類学という全く違う分野で勉強しています。外国人の学生の人と一緒に英語だけのディスカッションをするような学部らしいです。将来何をするかは全く分かりませんが、逆にルールがないと私自身もわくわくしますし、本人も「すごく楽しい」と言っています。

5. 同窓会の恩師の言葉

最後に、先ほど水落さんが話してくれた恩師である吉川行雄先生が、同期会の際に昔の授業の話をしてくれました。そのことを話したいと思います (Slide 10)。



Slide 10

「3分の2や6分の4、9分の6、これらの数は形の上では異なるものですが、みんな等しい数です。二つの数で一つの関係を記した分数は、数の表し方にすぎません。等分だったり、除法で指示したり、比で表したり、それを座標表面上に表すと点ができて、線で結ぶと直線になります。俯瞰してみるとバランスが生まれてきます。また、3と-3でゼロになる関係があります。これはあくまでも人が考えたもので、本当の数学の世界では答えは一つではありません。試験問題は一つの答えが出るように作ってあ

るだけで、それだけの価値でしかないのです。多様性も、さまざまな価値観があり、それぞれの関係を意識すると新しい秩序が生まれてバランスが生まれます。改めて数学を思い出し、自分たちの生活をもっと豊かに考えて、楽しく生きてほしいです」。そういう話を、中学生の頃から吉川先生はしてくださっていた事を思い出しました。

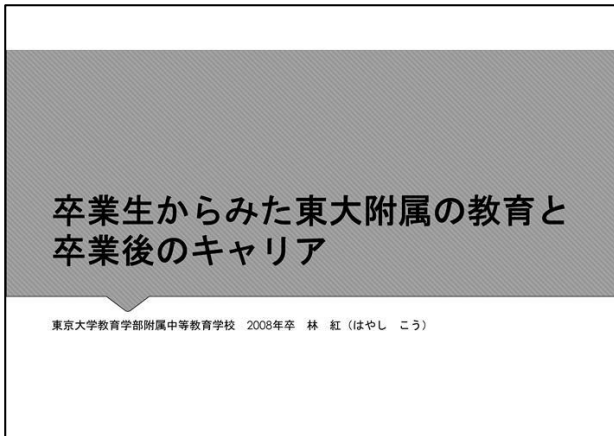
私たちには、仕事の難しさや上司との意見の食い違い、奥さんや旦那さんとの意見の違い、子どもが言うことを聞かないなど、いろいろな問題やすれ違いがあると思いますが、それらは全て一つの答えというものはありません。私たちは答えのない解決策で対応していると思います。物事の関係性を意識して取り組まなければ解決できないことがたくさんあります。宮沢賢治の世界ではないですが、生きていく過程に価値があるということを附属の多くの先生が教えてくれたのではないかと思います。たくさん文章を書き、意見を言い、自分でテーマを決めて考え、それを隣で見ってくれる先生がいて、少しアドバイスをしてくれる。そうやって、知識ではなく、知性的なものを教えてくれたのではないかと思います。

本来、知性は家庭で学ぶべきことといわれていましたが、さまざまな事情から、親が伝えることがなかなか難しい時代になってきたと思います。私が家族と幸せでいられることや、国内 6000 人の会社で無二な存在でいられること、生活している中でいろいろなアイデアが浮かんでくることは、附属で自ら学んで意識して考えるということをしてきたからではないかと思います。これからもさまざまな人と出会い、いろいろなことに挑戦し、一つ一つの価値を楽しんでいきたいと思っています。

林 紅 (2008 年卒業生)

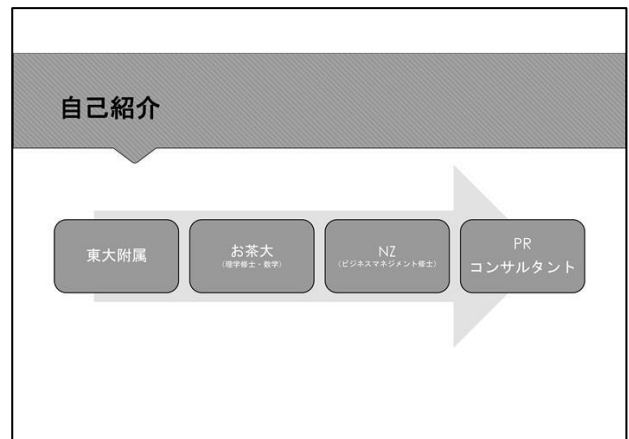
1. はじめに

2008 年卒業、57 回生の林紅と申します。よろしく
お願いします。卒業生からみた卒業後のキャリアと
いうことで、自身の経験を踏まえてお話ししたいと
思います (Slide 1)。



Slide 1

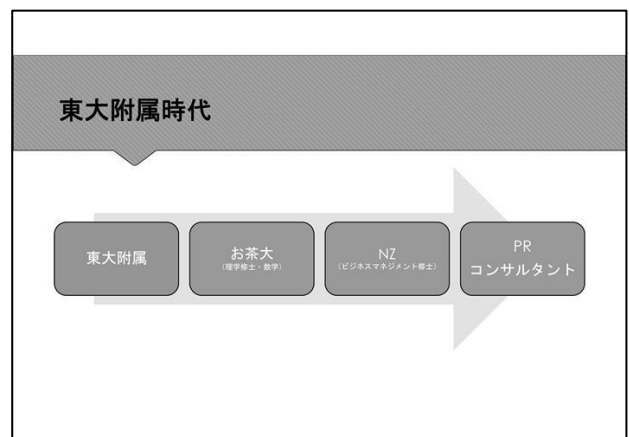
東大附属での経験と、さらにその先、自分自身が
どういう人生を歩んできたかという話をしたいと思
います。最初に簡単に説明すると、私は東大附属を
卒業した後、お茶の水女子大学に進学して数学を専
攻しました (Slide 2)。大学院まで進み、その後ニュ
ージーランドに渡航し、最終的にはニュージーラン
ドのオークランド大学の大学院に進学してビジネス
マネジメントの修士号を取得しました。日本に戻っ
てきて、現在はアシュトン・コンサルティングとい
う博報堂のグループ会社で働いています。主に海外
企業の日本での PR を担当しており、英語を使いな
がら広報の仕事をしています。



Slide 2

2. 東大附属時代

東大附属時代のお話をさせていただきます (Slide
3)。10 年以上も前の話なので、忘れていた部分も多
かったのですが、振り返ってみると、東大附属は「好
き」と「自分らしさ」を追求させてもらえる学校だ
ったと思います (Slide 4)。本当にいろいろな経験を
させてもらったと思います。日本の民俗芸能を学ば
うというテーマで行った 3.4 年の課題別学習では、
踊りを数カ月間練習した後、8 月のねぶた祭に実際
に参加しました。これは大きな祭りでしたが、翌日
には津軽地方の田舎の荒馬祭りにも参加して、町内
を練り歩きました。そのあとには和太鼓を数カ月間
練習して発表したり、次の学年では沖縄総合学習を
選択して、実際に現地に行って平和学習を行ったり
沖縄舞踊を現地の学生と学んだりしました。



Slide 3



Slide 4

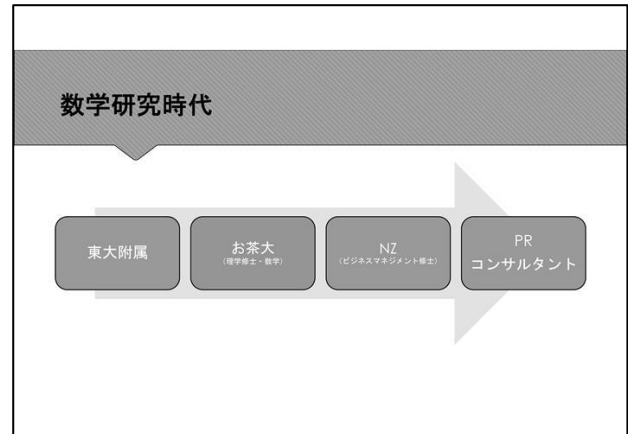
体を動かすことが好き、踊ってみたいという最初のモチベーションから、実際に数カ月間、民俗芸能を学び、現地に行って地方の子どもたちとインタラクティブに交流するという経験をしたことが、自分は日本文化に興味があるのだ、こういうことが好きなのだという発見につながりました。

高校に入ると、私服で通学してよかったので、すごく自由な格好をしていました。ファッションだけではなく、自分らしさの探究を学習レベルで経験させてもらったと思います。私は5年の宿泊研修で北海道を選択し、北海道にある東大の演習林に行き、「サステナブルな森づくり」というテーマで林業を学びました。それが大きなトピックではあるのですが、各個人が研究テーマを持っていて、私は蚊について研究し、それをみんなの前で発表しました。自分の目線で何かを追求することが東大附属ではできたと思います。

3. お茶の水女子大学時代

東大附属の生活を経て、お茶の水女子大学に進学しました (Slide 5)。東大附属では、数学の先生がユニークな方が多く、先生が面白いので勉強を頑張るようになり、数学で良い点数が取れるようになり、どんどん数学が好きになっていきました。東大附属の数学の授業では、一般の生徒が受講する数Ⅰ数Ⅱなどとは別に、数学特講か数学特論という名前のクラスがあり、そこでは教科書を一切使わずに、数学オリンピックの問題を解いてみたり、1時間を使っ

て偶数と奇数はどちらが多いと思うかディスカッションしたりしていました。そういうユニークな数学の学びを経験して、大学でも数学を学びたいと思い、お茶の水女子大学の理学部に進学しました。



Slide 5

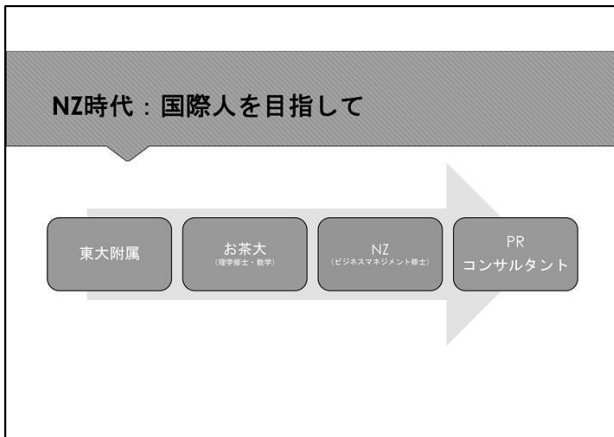
Slide 6 が、お茶の水女子大学時代の写真です。数学が好きな学友とディスカッションしながら学ぶことはすごく楽しかったです。それも、やはり東大附属での数学の先生との出会いがあったからだと思います。



Slide 6

4. ニュージーランド時代

私はその後、就職せずにニュージーランドに渡航しました (Slide 7)。国際的な場で英語を使い、いろいろなバックグラウンドを持った人たちと仕事をしてみたいと思ったのですが、残念ながら当時の私には英語力がなかったので、武者修行に行く気持ちでニュージーランドに渡りました。



Slide 7

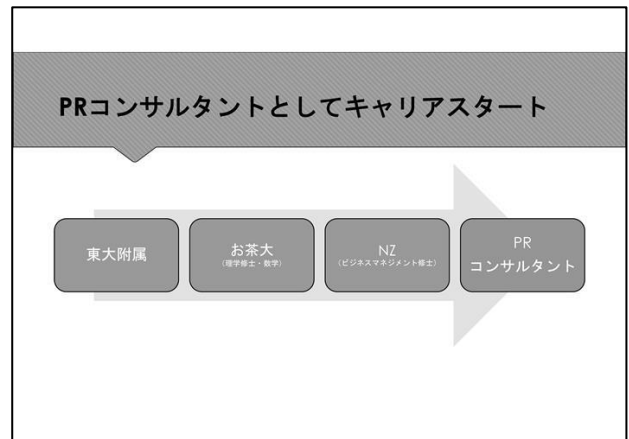
ニュージーランドに行って、海外の人と一緒に働くには専門性が大事だということを思い知りました。自分に何ができるのか、どういう道でどうやって生きていくのかという自分なりのビジョンが必要だと思い、ビジネスだったら数学をベースに自分のスキルが発揮できるのではないかという理由でビジネススクールに通いました。Slide 8 が当時の写真です。ニュージーランドはとても多国籍な国なので、白人だけではなく、アジアや中東など、世界中から学生が集まって一緒に勉強しました。一学年に 100 人強いました。真ん中の写真はコンペティションに参加したときのものです。日本人の自分だからできることは何かと模索し、「JAPAN Day」というイベントに同級生と一緒に出展して、日本のドリンクのカルピスなどを売ったこともあります。それが右側の写真です。このように海外の生徒と生活をしたニュージーランド時代でした。



Slide 8

5. PR コンサルタント

そのようなアカデミックな経験を経て、現在は PR コンサルタントとして仕事をしています (Slide 9)。PR コンサルタントは、企業のコミュニケーションのサポートをすることが仕事です (Slide 10)。メディアとの関係構築をして、その企業がメディアに露出するようにサポートする仕事もありますし、投資家とのコミュニケーションをコンサルティングすることもあります。企業のあらゆるコミュニケーションのサポートをしています。



Slide 9



Slide 10

ニュージーランドでの経験があったからだと思いますが、現在は、英語を使った海外企業のサポートや、日本企業のグローバル展開のサポートなどを担当しています (Slide 11)。



Slide 11

課題別学習：林業@東大演習林・蚊の研究

卒業論文：おばあちゃんのファッション

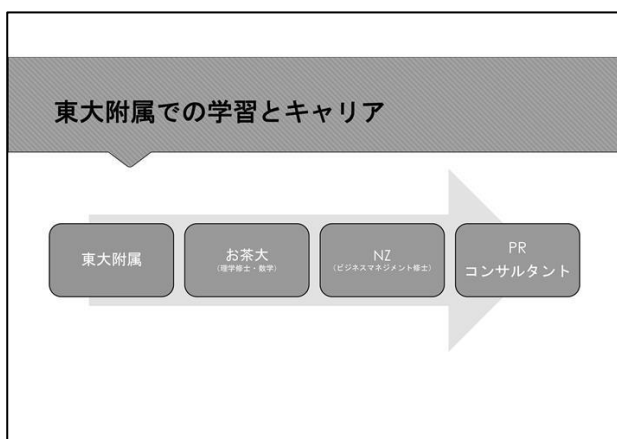
Key Insight: 「世界が不完全であること」と
「自分が変化を与えられる人間であること」を知る

Key Skill：考える力（疑問→探究→解決）とアウトプット力

Slide 13

6. 東大附属での学習とキャリア

東大附属の経験が自分の今の仕事にどのような影響を与えたか、今回の機会を頂いて改めて考えました (Slide 12)。



Slide 12

印象深いのは、総合学習やさまざまな研究をさせてもらったことです (Slide 13)。課題別学習で蚊の研究をして、卒業研究では「おばあちゃんのファッション」というテーマを選びました。私は女子高生のときにファッション誌を見るのが好きで、コンビニに行って雑誌を読んでファッションのヒントをもらっていたのですが、60代、70代のファッション誌がないと思っていました。高齢の方はどこからファッションのヒントを得て、どうやって服選びをしているのだろうと疑問に思ったことがきっかけで、「おばあちゃんのファッション」というテーマで卒業研究をしました。

その経験を通して、私は世界が不完全であることを学びました。高校2年生の頃から卒業研究のテーマ選びのことを考えて、その後「おばあちゃんのファッション」というテーマを選んだのですが、選ぶのがすごく難しかった記憶があります。世界はもう出来上がっているかのように当時は思っていました。教科書があり、その教科書から学ぶことがあり、自分が主体的に何かインパクトを残せる存在だとは思っていませんでした。しかし、卒業研究を通して、「世界は問題だらけなんだ。人々が日々その問題解決をしていて、自分は何かに寄与できる存在、社会にインパクトを残せる存在なんだ」ということに気付いて衝撃を受けました。

自分の目線で何ができるのかを考え、これだったら解決できるのではないかと実際にやってみる。そういうアウトプットの経験ができたことが、東大附属の学習ですごく大きかったのではないかと思います。

7. これからのキャリア&人生設計：個人でデザインしていく時代へ

これからは、いろいろなことを自分で決めていかなければならない時代だと思います (Slide 14)。仕事の面でいっても、与えられた仕事ではなく、自分自身がその都度、選択していかなければいけません。パーソナルライフの面でいっても、どうやってお金を得て、それをどうやって使っていくのか、資産運用のことなどを自分でプランニングしていかなければ

ばならない時代だと思えます。そういう時代を生き
ていく上でも、私が東大附属で得た考える力、問題
解決の力、それをアウトプットする力はすごく大切
ではないかと思えます。

**これからのキャリア&人生設計：
個人でデザインしていく時代へ**

The diagram features three interlocking gears. The top gear is labeled 'パーソナルライフ' (Personal Life), the middle gear '仕事' (Job), and the bottom gear '考える力' (Thinking Power). Arrows indicate a clockwise flow from Job to Thinking Power, and then to Personal Life. To the left, text reads '仕事' followed by '決められた仕事' (Fixed job) and '↓' (down arrow), then '自由な選択' (Free choice). Below this, it says 'Key: 専門性・スキルセット・熱量' (Key: Specialization, Skill set, Passion). To the right, under the heading 'パーソナルライフ', it lists: '・年金受給→資産運用' (Pension receipt → Asset management), '・破壊的イノベーション (AI)' (Disruptive innovation (AI)), and '・個人がブランディングする時代 (SNS)' (An era where individuals brand themselves (SNS)).

仕事
決められた仕事
↓
自由な選択
Key: 専門性・スキルセット・熱量

パーソナルライフ
・年金受給→資産運用
・破壊的イノベーション (AI)
・個人がブランディングする時代 (SNS)

Slide 14

**これからのキャリア&人生設計：
個人でデザインしていく時代へ**

The diagram features three interlocking gears. The top gear is labeled 'パーソナルライフ' (Personal Life), the middle gear '仕事' (Job), and the bottom gear '考える力' (Thinking Power). Arrows indicate a clockwise flow from Job to Thinking Power, and then to Personal Life. To the left, text reads '仕事' followed by '決められた仕事' (Fixed job) and '↓' (down arrow), then '自由な選択' (Free choice). Below this, it says 'Key: 専門性・スキルセット・熱量' (Key: Specialization, Skill set, Passion). To the right, under the heading 'パーソナルライフ', it lists: '・年金受給→資産運用' (Pension receipt → Asset management), '・破壊的イノベーション (AI)' (Disruptive innovation (AI)), and '・個人がブランディングする時代 (SNS)' (An era where individuals brand themselves (SNS)).

仕事
決められた仕事
↓
自由な選択
Key: 専門性・スキルセット・熱量

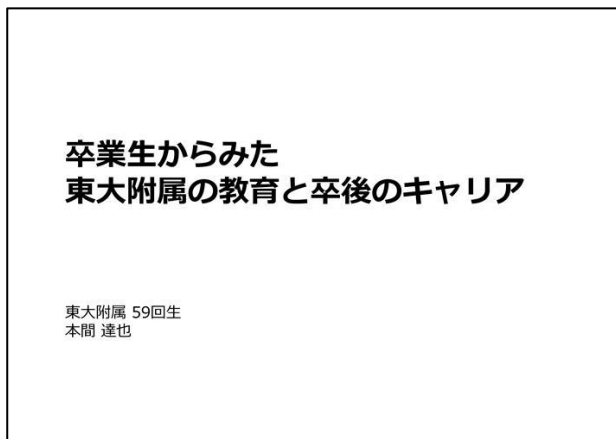
パーソナルライフ
・年金受給→資産運用
・破壊的イノベーション (AI)
・個人がブランディングする時代 (SNS)

Key: 激動の時代を個人単位で生き抜いていかなければならない

本間 達也 (2010 年卒業生)

1. 自己紹介

東大附属 59 回生の本間と申します。本日はよろしくお願ひします (Slide 1)。最初に簡単に自己紹介させていただきます (Slide 2)。私は 2004 年に東大附属に入学して 2010 年に卒業しました。在学中の 6 年間は部活動でずっと水泳をやっていました。卒業研究のテーマは「三者協議会」で、保護者と先生と生徒が集まり、どうしたら学校を良くできるかということをお話し合う場がどのように運営されているかを研究しました。



Slide 1



Slide 2

その後、大学では、合意形成がどのように起こるのか、どうしたらより良い意思決定ができるのかということに興味を持ち、政治学科で 4 年間学びました。とはいえ、その後は政治とは関係のない楽天という EC のコンサルティング会社に新卒で入社しました。元々、東大附属在学中から、クラスで掲示板

を作り、そこでみんなでコミュニケーションを取ったり、個人でヤフオクや EC などをしていたので、インターネットには興味がありました。

その後、2018 年に東大附属の同級生と結婚しました。妻は助産師で、今は青年海外協力隊でマダガスカルに 2 年間派遣されています。新婚早々、別居状態ということです。楽天の後に何社か経験し、今はラブグラフという 10 人ぐらゐのスタートアップ会社の経営をしています。

ラブグラフは出張撮影サービスを提供しています (Slide 3)。簡単に言うと、どこでも撮れるスタジオアリスのようなものです。ウェディングフォトだったり、お宮参りや七五三であれば神社など、撮りたい場所にカメラマンを派遣して撮影するというサービスです (Slide 4)。



Slide 3



Slide 4

2. 中学・高校時代

中学・高校時代は、クラスに 1 人いるような、に

ぎやかし役という感じで6年間を過ごしました。Slide 5は、左側が放課後にみんなで黒板に落書きをしたときに撮った写真で、右側は授業風景です。東大附属は班活動がすごく多くて、これは4人1組で班を組んで何かを議論しているときの様子です。



Slide 5

中学3年生と高校1年生のときに課題別学習がありました。中学3年生のときは「大衆社会とメディア」というテーマで、どのように人に情報を伝えていくのか、メディアはどういう役割を果たすのかというような研究をしました。具体的には、1950年ごろに作られた「宇宙戦争」という映画と、2005年ごろに作られた最新の「宇宙戦争」を比較して、どういふ情報の伝え方の違いがあるのかを研究しました。昔はすごく文字情報が多いのですが、最近のものは映像がグラフィカルなので、言葉で伝えなくても情報が伝えられるようになってきているということをもとめたような気がします。

高校1年生のときは、沖縄の文化学習でエイサーを踊ったり、戦争の平和体験学習などをしました。高校2年生のときに宿泊研修で広島に行き、そこでも平和体験学習をしました。卒業研究は、先ほど申し上げたとおり「三者協議会」というテーマでした。

4. 大学時代

大学時代は、学業には正直それほど取りこまらずに、課外活動を重視していました。Slide 6の左側がスタディツアーを組んだときの写真です。社会問題に関するテーマを自分で設定し、その現場に人を連れて

いって、その現場にどういふ社会課題があるかを説くようなツアーを企画・運営していました。大学在学中に東日本大震災があり、社会に対して自分がどのように働き掛けられるかを当時はすごく意識していました。私の同級生でも、震災をきっかけに被災地に移住し、現地のNPOでずっと活動している友人がいて、当時の経験がその後のキャリアに生きているケースだと思います。右側は、2年間ほどテーマパークのスタッフをしていたので、そのときに撮った写真です。他にも塾講師など、アルバイトをたくさんしていました。

5. 仕事の遍歴

このような大学時代を経て、楽天に入社しました。会社の大小にかかわらず、今までEC業界を軸に4社を経験しました(Slide 7)。楽天にはインターネットが好きだからという理由で入社し、営業やマーケティングの仕事をしました。



Slide 7

すごく大きな会社だったので、自分たちで一旗揚げたいという気持ちが出てきて、友人が起業したLabitという会社に転職して一緒に経営をしました。当時はスマホやメルカリなどがすごく出てきた時代で、Labitでは本に特化したフリマアプリを展開していました。紆余曲折ありLabitメンバー全員でメルカリに入ることになりました。その後、メルカリの中では、マーケティングや新規事業開発など面白いことをやらせてもらいました。

メルカリで2年半ぐらい働き、企業規模が大きく

なってきたので、もう少しフェーズの早い段階でまたチャレンジしたいということで、ラググラフという出張撮影サービス会社を立ち上げました。

6. 東大附属での学び

東大附属での学びは何だったかということを中心に整理しようと思い、Slide 8 の表を作りました。一言で言うと、ソフトスキルがすごく育まれました。対人関係やキャリアデザイン、探究心をすごく育むことのできた6年間だったと思います。

年次	事象	学び	学びが起きた場面
全学年	日々の授業+総合学習、課題別学習、宿泊研修、卒業研究	課題設定とアウトプット(資料作成、プレゼンテーション等)/社会課題への理解	【大学】ゼミ/大学のレポート 【社会】社内外横断型のプロジェクト
全学年	文化祭、体育祭	ステークホルダーとの調整力	【大学】アルバイト/インターン 【社会】社内外横断型のプロジェクト
全学年	多種多様なクラスメイト(性別、双子、人種、特技)	他社理解、自己認識	【全般】良好な対人関係の構築/チームマネジメント
全学年	服装の自由	自律 自分で判断する力(≠自分よがりな判断)	【全般】良好な対人関係、チームの構築
全学年	コの字学習	助け合う力	チームマネジメント
2年生	80kmウォーク	チームワーク/個人ではなくチームでコトに向かう姿勢	【大学】サークル 【社会】経営、マネジメント
4年生・6年生	柔軟なカリキュラム	キャリアデザイン	【全般】人生設計
5・6年生	卒業研究	なんとかする力(=意味づける力)	【全般】理不尽な営業目標とか..w

Slide 8

例えば全学年の日々の授業や総合学習、課題別学習、宿泊研修、卒業研究では、課題設定の学びがありました。課題別学習で先生方に用意していただいたテーマを選択していくところから、徐々に卒業研究に向けて自分でテーマを一から作るということをしていったので、すごくやりやすかったと思います。そのことは大学のゼミやレポートに生きていたり、社会に出てからは、社内外横断のプロジェクトや社会課題のようところに生きてきたと思います。

文化祭や体育祭では、ステークホルダーとの調整力を学びました。私たちの年代は、いろいろなルールができはじめたり、ルールが変わったりする年代だったので、そこでどうやって今までの自由を保つかというような思考が育まれたと思います。具体的なエピソードを言うと、体育祭で今まではクラス T シャツを自由に作っていたのを、やめるような話が学校側であり、運営メンバーが先生方と協議しました。そういうケースが結構たくさんあったと思いま

す。これが生きた場面としては、大学だとアルバイトやインターンなど社会人と接する場面、社会に出てからだと、普通の社会活動に生きていると思います。

東大附属には多種多様なクラスメイトがいました。性別もそうですが、双子がクラスに 10 組ぐらいいたり、いろいろな国籍の人がいたり、特技や一芸を持っている人、例えばバレーがすごく得意でオーストラリアに途中で留学した子などがいて、そういう中で他者理解や自己認識がすごく育まれたと思います。これは友人関係構築やチームマネジメントに生きてきたと思います。

中学生までは制服着用が校則で義務付けられていましたが、高校生からは服装は自由でした。その中で TPO を判断して自分で服装を選ぶというのも一つの学びだったと思います。ここでは自分で判断する力が育まれたと思います。

コの字型学習というのが、私の在学中に始まりました。生徒全員が黒板の方に向いているのが普通の教室だと思いますが、席をコの字に並べ替えて、生徒同士が向き合う形で学習したのが結構面白かったです。これにより、助け合う力がすごく育まれたと思います。

中学2年生のときに、学年全員で80kmを歩く80kmウォークというイベントがあり、個人中心ではなくチームで物事に向かうことを学びました。これはサークルや経営、マネジメントのところにすごく生きていると思います。

4~6年生(高1~高3相当)は柔軟なカリキュラムになっていて、文系・理系だけでなく、その中で好きな授業を選択することができました。自分は何でこれを選択するべきなのか、そもそも将来は何をしたいのかというような、自分のキャリアに対する問いを立てる機会が強制的にあったので、そういう意味では人生設計を高1ぐらいから何となく考えていたのだらうと思います。

5~6年生(高2~高3相当)は卒業研究がありました。私は正直、卒業研究がうまくいかなかったタ

イブなのですが、何とかする力は付いたと思います。途中で何度かテーマを変えようとも思いましたが、これをやることによって自分にどういう力が付くかを考えて、意味付けをして頑張っていく力が付きました。このおかげで、社会人1年目のときは、理不尽な営業目標などへの耐性が付いていたと思います。

私は目立ちたがり屋の部分がパーソナリティとして元々備わっていました。目立つというのは今にエネルギーを置くことだと思いますが、東大附属の学習には、問いを立てたり未来にベクトルを向けるような仕掛けがたくさんあったと思います。目立ちたがり屋や行動力があるというパーソナリティの中で、どう他者と関係を構築していくか、どのように人生を設計していくかというところは、東大附属の中でかなり培われたのではないかと思います。

質疑応答

(山本義春) 東大附属の特徴的な学習の効果を検証することが、このプロジェクトの一つの目的です。ところが、皆さんが受けたような授業や教育を他の学校の生徒は受けていないわけで、比較の対象がないということが大きな問題なのですが、皆さんが社会に出てから、「この人は考える力や解決する力があまりない」と思うようなことは多々あったのでしょうか。

(水落) 会社の中にいると、指示待ちの人は結構います。私は疑問に思ったことはすぐに手を挙げて聞く方なので、指示待ちの人を見ると、自分とは違うのかなというのは感じます。私も附属しか出ていないので他の高校のことは分かりませんが、そういう感じは持っています。

(林) 私は自分自身をすごく変わった経歴の持ち主だと思っています。大学で数学を専攻したこともそうですし、その後、新卒で就職せずにニュージーランドの大学に行ったこともそうです。ニュージーランドに行くか行かないか、仕事をするかしないかと考えていたときに背中を押してくれたのは、東大附属時代の同級生が多かったと思います。東大附属以外の人は少し批判的というか、「新卒というのは日本ではすごく大事なことだ」というアドバイスが多かったのですが、附属の同級生からは「好きならやればいい」「行きたいなら行けばいい」というアドバイスが多かったです。そういう自由な発想には、責任は自分にあるという厳しさも伴うと思いますが、東大附属時代の友人には寛容性のある人が多いと思います。

(長谷) 私は周囲から「いつも忙しそうに何かをしているね」と言われます。しかし、私にしてみれば当然のことです。東大附属時代も常に同時並行でいろいろなことをしていました。私の場合は卒業す

るのも大変だったので、単位の計算をしながら自分の遊びもするという感じで、その延長線上に今があるのではないかと思います。

(本間) 自分で問いを立てて、自分で意思決定して進んでいくという経験が東大附属の場合が多いので、敷かれたレールから外れるような選択をしても受け入れてくれることが多いのではないかと思います。他校出身の人は「本当に大丈夫？」という反応が多いので、そこはかなり違うと思いました。

「主体的・探究的な学びと卒後の学びや仕事との関連」
 天井 響子 (CASEER 特任研究員・教育学研究科博士
 課程)

私からは定量的な分析の結果ということで、先ほど川本先生からご紹介があった卒業生パネル調査のデータを使用した、卒業前の主体的・探究的な学びと卒業後の学びや仕事との関連についての分析結果を紹介します (Slide 1)。

CASEER主催シンポジウム
 2020年1月13日 (月)

主体的・探究的な学びと卒後の学びや仕事との関連
 —卒業生調査の結果から—

天井 響子
 学校教育高度化・効果検証センター
 特任研究員
 kyoko-y@p.u-tokyo.ac.jp

Slide 1

本日の内容は Slide 2 のとおりです。まずは回答者の全体像の把握ということで、年齢・性別の分布や、主体的・探究的な学びに関するデータを概観します。次に、主体的・探究的な学びと卒後の学びや仕事との関連を見て、最後に、それらによって身につけた力とは何かという検討を加えていきたいと思ひます。

本ご紹介する内容

卒業生パネル調査の分析結果

1. 回答者の全体像と基礎統計
 - ・年齢・性別の分布
 - ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」の経験の有無
 - ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」に対する取り組み
 - ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」の効果の認識
2. 主体的・探究的な学びと卒後の学びや仕事との関連
 - ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」と進学先での学び
 - ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」と現在の仕事
3. 主体的・探究的な学びによって身につく力とは
 - ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」に関連すると思われる力

Slide 2

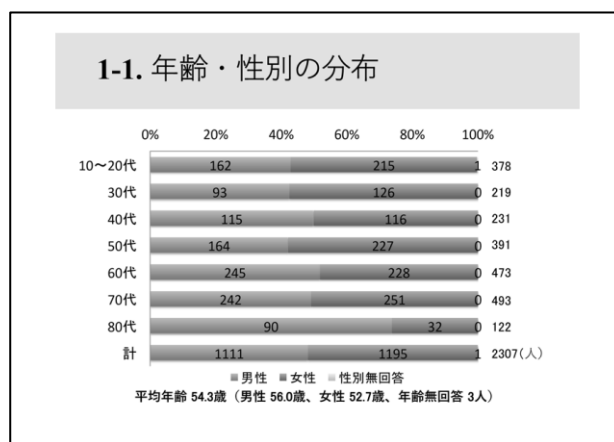
1. 回答者の全体像と基礎統計

まず、回答者の全体像と基礎統計です (Slide 3)。

1. 回答者の全体像と基礎統計

Slide 3

Slide 4 のデータは、2017 年度に実施した卒業生パネル調査の回答者の分布です。全部で 2307 名の方に回答していただきました。ボリュームゾーンは 50~70 代で、その影響を受けて平均年齢は 54.3 歳となっています。性差は、80 代は恐らく時代的な背景があって顕著に男性の方が多く回答していますが、その他の年代に関しては大体 1 対 1 の比率になっています。



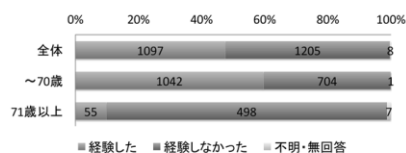
Slide 4

早速、主体的・探究的な学びに関するデータを見ていきます (Slide 5)。東大附属の主体的・探究的な学びとして代表的なものが卒業研究です。自分でテーマを決めて、さまざまなソースから情報を得て、現地に行ったり体験したりして、そのテーマに対する答えを探究していく卒業研究と、その前段階としての課題別研究をまとめて特別学習と呼んでいます。私の発表における「主体的・探究的な学び」は、この特別学習を意味していると考えていただければと思います。

1-2. 「特別学習」の経験の有無

東大附属における特別学習 / 卒業研究・課題別研究

- 1961年度より開始（回答時70歳以下の方は全員経験）
- ある問題を考えたり、発表したり、話し合い（ディスカッション）をしたり、グループで取り組んだりする参加型の授業
- 71歳以上でも「経験した」と認識している可能性はある



Slide 5

特別学習は1961年より開始しており、調査の時点で70歳以下の方は全員が経験しています。調査ではまず、特別学習と呼ばれる、問題について考えたり発表したり話し合ったり、グループで取り組んだりする参加型の授業を経験したかどうかを問い、それに対して、「経験した」「経験しなかった」という形で回答していただきました。

グラフを見ると、本当は真ん中の棒グラフ中央の70歳までの方は全員が経験したはずなのですが、「経験した」と答えた方は約6割となっています。一方で、71歳以上で「経験した」と回答した方は、制度としての特別学習はないのですが、そのような参加型の授業を経験したと認識していることになります。

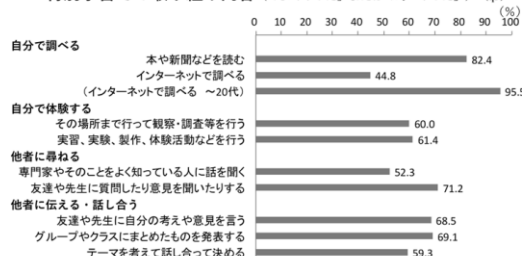
この後、主体的・探究的な学習の経験あり群、なし群という表現が出てきます。70歳以下の方は全員経験していますが、あり群、なし群は、経験したという認識があるかないかという差になるのでご注意ください。

次に、回答者全体で「経験した」と認識している1097名について、その特別学習の内容がどのようなものだったかという回答を見ていきます。Slide 6は、特別学習での取り組みの内容に関するデータです。本や新聞を読む、インターネットで調べるなど九つの学習方法に対して、「よくやった」「時々やった」「あまりしなかった」「ほとんどしなかった」の4件法で回答していただきました。青い棒グラフは、「よくやった」または「時々やった」と回答した方のパ

ーセンテージです。

1-3. 「特別学習」に対する取り組み

特別学習での取り組み内容（「よくやった」または「時々やった」）(q3)



Slide 6

ここで注目したい点が2点あります。一つ目は、上から二つ目の「インターネットで調べる」の数字です。44.8%というのは少ないと思うかもしれませんが、これは当然のことです。今の70代、80代の方が中学生や高校生のときはもちろんインターネットは普及していませんでした。ですので、中学生や高校生のときにインターネットでの情報収集が既に可能だった20代までの方に年代を絞って分析してみました。すると、全体では44.8%なのですが、20代に関しては95.5%の方がインターネットでの情報収集を行ったと回答しています。ここで言えることは、主体的・探究的な学びの方法もテクノロジーや時代の変化によって変化しているということです。

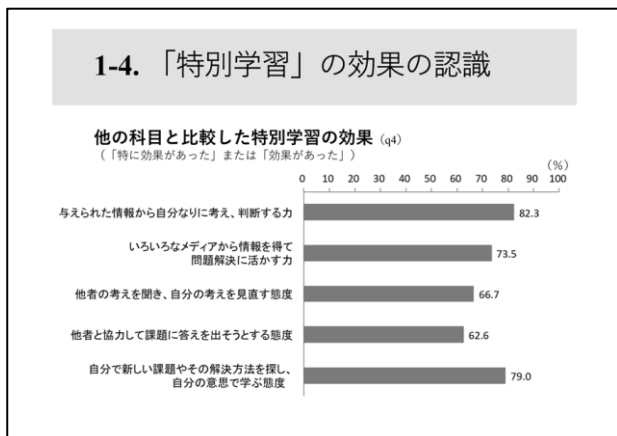
注目したい点の2点目は、「自分で体験する」という領域のパーセンテージの高さです。ご覧のとおり、九つの学習の方法は、「自分で調べる」「自分で体験する」「他者に尋ねる」「他者に伝える・話し合う」という四つの領域に分かれています。このうち「自分で体験する」の内容を見ると、「その場所まで行って観察・調査等を行う」「実習、実験、製作、体験活動などを行う」という、中学生や高校生にとっては若干ハードルの高いものとなっています。かかる時間やコスト、労力から見ても、中学生や高校生がそういったことを主体的に行うことは難しい中で、6割の方がそれを行っているというのは、非常に素晴らしいことだと思います。

最近ではインターネットが非常に普及しており、ほ

とんどの情報がネット経由で手に入るので、現地まで行くという活動は減っているのではないかと予測する方もいるかもしれません。私もそう思い、年代別で分析してみたところ、予測とは逆の結果になりました。「その場所まで行って観察・調査等を行う」という活動は、50代、60代の回答では3割を切っていたのですが、40代に関しては約50%の方がそういった活動をしたと回答していて、20代、30代は70%を超える方々がそういう活動をしたと回答していました。

これがどういうことなのか考えてみましたが、恐らく卒業研究というのは、インターネットで調べた情報をまとめて終わりというものでは認められないのです。従って、どの場所に行ったら自分の求める情報が実際に得られるのか、誰にコンタクトを取ると体験に結び付くのかといった、実体験に結び付く情報をインターネットで得て、それを実際の活動につなげているのではないかと考えました。

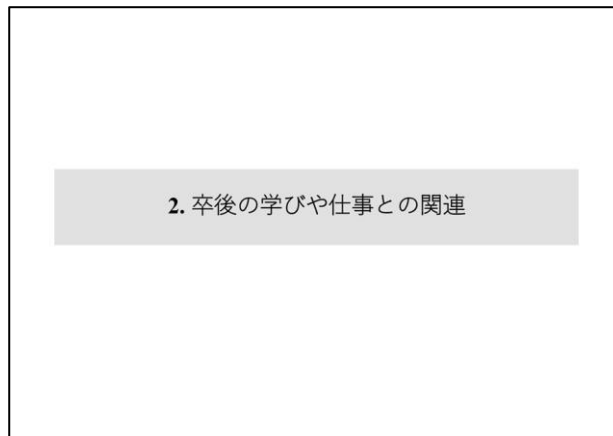
Slide 7は、他の科目と比較したときの特別学習の効果についてのデータです。「特に効果があった」または「効果があった」と回答した方の合計のパーセンテージを示しています。全ての項目について6~8割の方々が「効果があった」と回答しています。特に「効果があった」という回答が多かったのは、「与えられた情報から自分なりに考え、判断する力」「自分で新しい課題やその解決方法を探し、自分の意思で学ぶ態度」でした。これらの力が身に付いたということです。



Slide 7

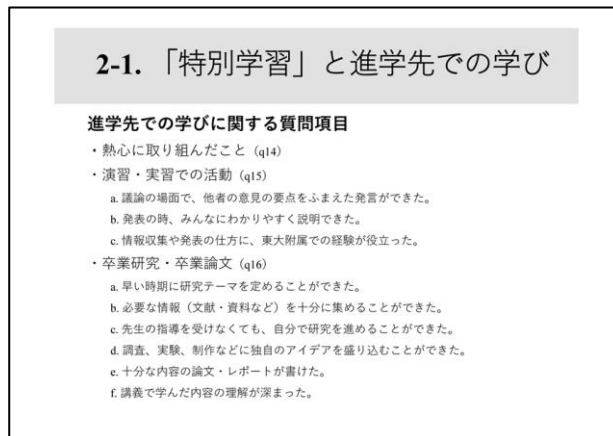
2. 卒後の学びや仕事の関連

ここからは、卒業後の学びや仕事との関連に関する分析結果です (Slide 8)。



Slide 8

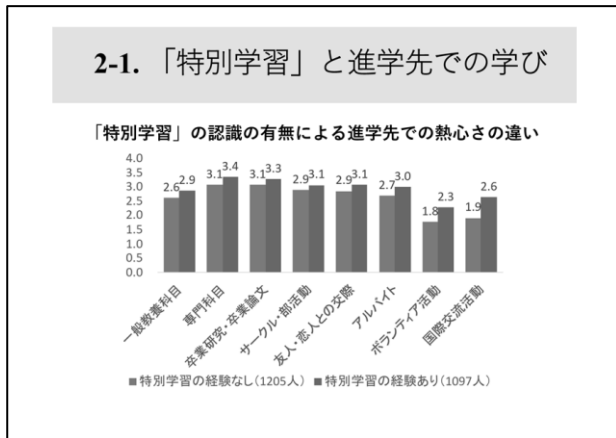
進学先での学びに関する質問項目は主に三つです (Slide 9)。一つ目は、進学先で熱心に取り組んだこと。二つ目は、演習・実習での活動の自己評価。三つ目は、卒業研究・卒業論文での取り組みの自己評価です。



Slide 9

まず、特別学習を経験したか、していないかの認識の有無による進学先での熱心さの違いをお示しします。Slide 10は、それぞれ左側のバーが特別学習の経験がなかったと認識している方、右側のバーが特別学習の経験があったと認識している方です。これを見ると、どの項目も、特別学習を経験したと回答した人の方が熱心に取り組んでいる度合いが高いということが見て取れます。特にボランティア活動や国際交流活動といった社会に目を向けた活動で顕著

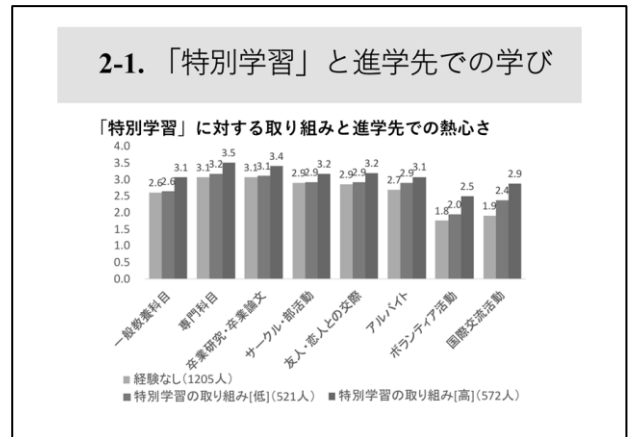
な差が出ています。



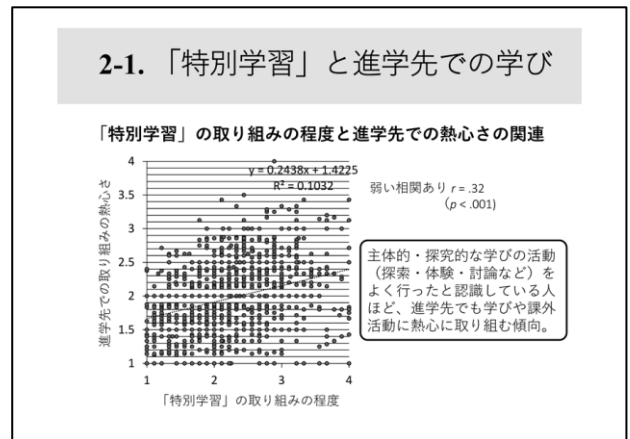
Slide 10

特別学習の経験があると認識している方の中でも、実際に熱心に取り組んだか、そうではないかという違いがあると思います。そこで、先ほどのSlide 6の「よくやった」を4点、「時々やった」を3点というふうに得点化し、「経験あり」を平均が高かった方と低かった方の二つに分けて分析を行いました。

その結果が Slide 11 です。特別学習の経験なし群と、経験はあったけれども取り組みが低かった群と、取り組みが高かった群の三つに分けて比較しました。すると、特別学習の取り組みが高かった方で熱心さが突出しており、経験なし群と取り組みが低かった群ではあまり差がありませんでした。ここから言えることは、実際に経験したか、していないかという認識の差以上に、特別学習に熱心に取り組んだかどうかの差が、進学先での熱心さに影響しているのではないかということです。そこで相関係数を出してみると、 $r = .32$ という弱い相関があり、主体的・探究的な学びの活動をよく行ったと認識している人ほど、進学先でも学びや課題活動に熱心に取り組む傾向が強いことが見て取れます (Slide 12)。

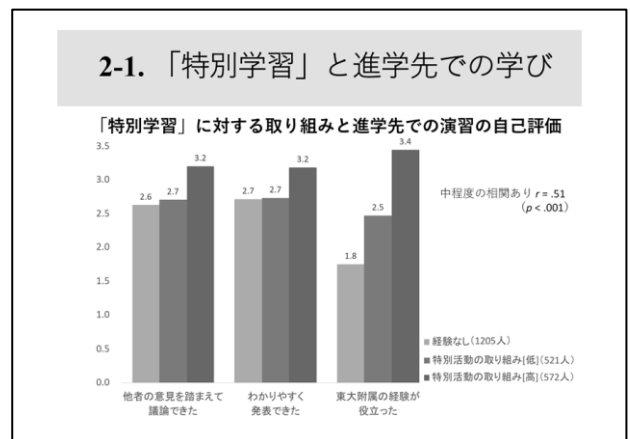


Slide 11



Slide 12

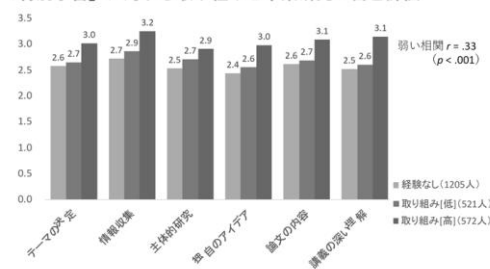
Slide 13 は、進学先での演習形式の授業に対する自己評価です。こちらも、特別活動の取り組みが高かった人が、演習形式の授業に対する自己評価も高いことが見て取れます。Slide 14 は卒業研究の自己評価です。こちらも同様の傾向が見られます。



Slide 13

2-1. 「特別学習」と進学先での学び

「特別学習」に対する取り組みと卒業研究の自己評価



Slide 14

包括して言えることは、特別学習に積極的に取り組んだ度合いが高い人ほど、進学先での発表やディスカッションといった演習形式の授業、それから卒業研究に関する取り組みで高いパフォーマンスを上げていたと自己評価していることです。

次に、仕事に関する質問項目では、現在の仕事に対する意識について取り上げました (Slide 15)。この後に話題提供される荒木さんと田垣内さんが、より詳しいモデル分析をしているので、私からは簡単に述べるにとどめさせていただきます。

2-2. 「特別学習」と現在の仕事

仕事に関する質問項目

- ・現在の仕事に対する意識 (q31)
 - 自分の仕事の内容やペースを自分で決めることができる。
 - 職場全体の仕事のやり方に自分の意見を反映させることができる。
 - 自分の能力を発揮できる。
 - 仕事を通じて職業能力を高める機会がある。
 - 教育訓練を受ける機会がある。
 - 仕事をするにやりがいを感じる。

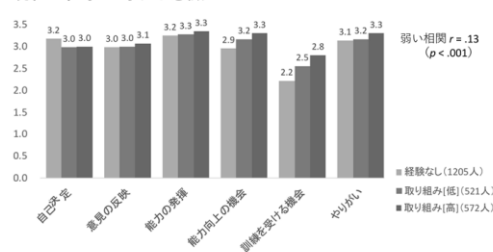
Slide 15

現在の仕事に対する認識の全体的な傾向は Slide 16 のとおりです。先ほどまでの、取り組みの高い人が突出しているというデータとは少し違う傾向が見て取れると思いますが、このデータは見方に注意が必要です。例えば一番左の「自己決定」は、自分の仕事の内容やペースを自分で決められるということなのですが、経験なし群の方が高くなっています。これは、全ての年代をひっくるめたデータなので、

もしかすると特別学習うんぬんよりも、年齢やその他の要素の影響が強く出ている可能性があります。

2-2. 「特別学習」と現在の仕事

現在の仕事に対する意識

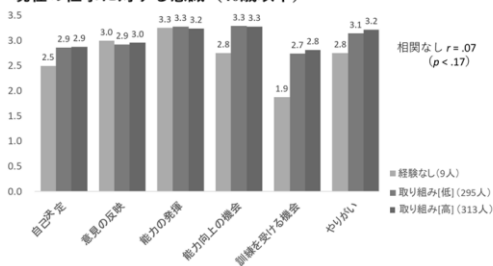


Slide 16

そこで、40 歳以下に絞って分析し直してみると Slide 17 のようなグラフになりました。経験なし群よりも経験あり群の得点が高い項目が多いのですが、取り組み低群と高群の間では違いはあまり見られませんでした。

2-2. 「特別学習」と現在の仕事

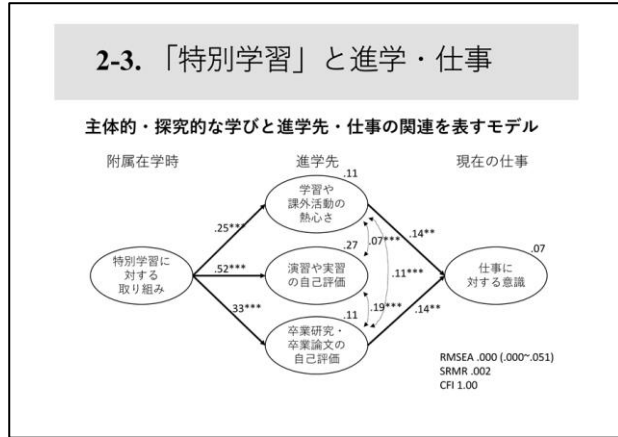
現在の仕事に対する意識 (40歳以下)



Slide 17

ここまでの分析をまとめる意味で、附属在学時の特別学習に対する取り組み、進学先での取り組み、そして現在の仕事に対する意識の関連を表すモデルを作ってみました (Slide 18)。モデルの適合度は右下に書いてあるとおりで、適合度の問題はありません。矢印は変数と変数の間に関連があることを示しており、その上の数字は、その変数間の関連の強さを示しています。在学時に特別学習に対する取り組みが高かった人ほど、進学先で学習や課題活動に熱心に取り組んでおり、演習、実習、卒業研究などへの自己評価が高いこと。また、進学先で学習や課題活動

に熱心に取り組んでいた方や、卒業研究をよくできた
と自己評価している方ほど、現在の仕事に対する
意識もポジティブである傾向があることが読み取れ
ます。



Slide 18

3. 主体的・探究的な学びで身に付く力とは

主体的・探究的な学びで身に付く力について簡単
に述べたいと思います (Slide 19)。ここで扱った変数
は、認知的な要求 (頭を使うのが好きか) と探究心
の二つです (Slide 20)。

3. 主体的・探究的な学びで身につく力とは

Slide 19

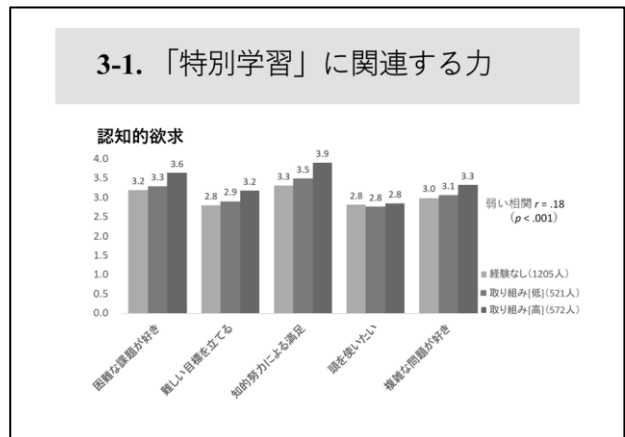
3-1. 「特別学習」に関連する力

「特別学習」に関連する力に関する質問項目

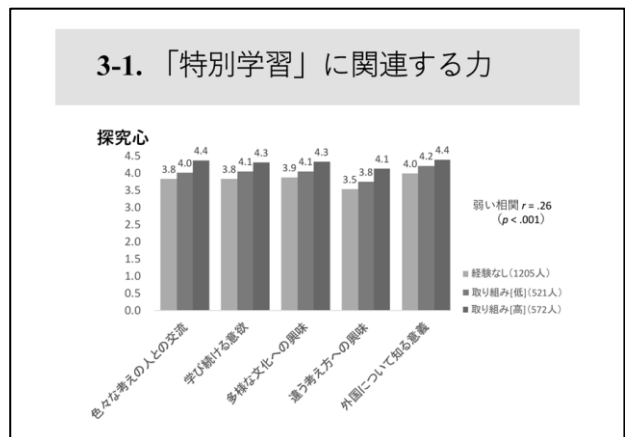
- ・認知的欲求 (頭を使うのが好きか) (q8 a-c)
 - a. あまり考えなくてもよい課題よりも、頭を使う困難な課題の方が好きだ。
 - b. かなり頭を使わなければ達成されないようなことを目標にすることが多い。
 - c. 一生懸命考え、多くの知的な努力を必要とする重要な課題を成し遂げることに特に満足を感じる。
 - d. 常に頭を使わなければ満足できない。
 - e. 簡単な課題よりも複雑な問題の方が好きだ。
- ・探究心 (q8 f)
 - a. いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい。
 - b. 生涯にわたり新しいことを学びつづけたと思う。
 - c. さまざまな文化について学びたいと思う。
 - d. 自分とは違う考え方の人に興味を持つ。
 - e. 外国の人がどのように考えるかを勉強することは、意義のあることだと思う。

Slide 20

どちらも、Slide 21 と Slide22 を見ていただくと分
かるとおり、取り組みが高い群のバーが一番高くな
っています。ただし、ここで一つ述べておきたいの
は、附属の卒業生の探究心は元々非常に高いとい
うことです。特別学習の認識にかかわらず、附属の卒
業生は探究心が元々非常に高いために、群間差が見
えにくくなっていると思います。



Slide 21



Slide 22

4. まとめ

最後に、まとめとして2点述べたいと思います (Slide 23)。1点目は、主体的・探究的な学びを多く経験したと回答した人の方が、進学先でも学習や課外活動に熱心に取り組んでおり、仕事に対しても前向きである傾向が読み取れました。2点目は、特別学習の経験の単純な有無以上に、それらを通してどれほど多様な探究、経験、討論の取り組みを経験したかによって、卒後の取り組みの程度が異なる可能性が示唆されました。

3-1. 「特別学習」に関連する力

結果のまとめと考察

- ・主体的・探究的な学びを多く経験したと回答した人の方が、進学先でも学習や課外活動に熱心に取り組む、また仕事に対しても前向きである傾向が読み取れた。
- ・「特別学習 / 卒業研究・課題別研究」の経験の単純な有無以上に、それらを通して**どれほど多様な探究・経験・討論の取り組みを経験したか**によって、上述のような卒後の取り組みの程度が異なる可能性がある。

今後の調査への展望

- ・主体的・探究的な学びによって認知的欲求や探究心などの内的な力が育まれる可能性が示唆されたが、元来それが高い人が積極的に特別学習に取り組んでいたという逆の関連も想定される。今後は、在校生調査との接続による**縦断的な学びの効果の検討**が期待される。

Slide 23

主体的・探究的な学びによって認知的探求や探究心などの内的な力が高まる可能性が示唆されています。しかし、元来それが高い人たちが積極的に特別学習に取り組んでいたという逆の関連も想定もされます。従って、今後の研究では、在校生の調査と接続した縦断的な学びの効果を検討する必要があるのではないかと思います。

ご静聴ありがとうございました

調査へご協力くださいました東大附属中等教育学校（旧・東大附属・高等学校）の在校生、卒業生、保護者のみなさまおよび関係者の方々に深く御礼申し上げます。

ご意見やご質問等ございましたら、お気軽にご連絡ください。

天井響子（あまいきょうこ）

kyoko-y@p.u-tokyo.ac.jp

質疑応答

(Q1) 特別研究の取り組みと卒業研究の取り組みを分けて考えた分析はできるのでしょうか。

(天井) 今回は、特別学習、卒業研究、課題別研究をひとまとめにして経験があったかないかを尋ねています。今回使わなかった変数の中で、卒業研究に関してどれくらい取り組みをしたかなど、分かれた項目もあるので、おっしゃるような分析は可能だと思います。

(Q1) それは今回はされていないのですね。

(天井) 今回は時間的な制約があって、していません。

「卒業生調査の結果から見た東大附属卒業生のキャリア」

荒木 真歩（教育学研究科修士課程）

田垣内義浩（教育学研究科修士課程）

（田垣内） 私たちは、東大附属特有の探究的で協働的な学びがキャリアの役に立つのかということ、先ほどの天井さんの発表を踏まえて、また別の視点から紹介したいと思います（Slide 1）。発表の流れはSlide 2 のとおりです。

シンポジウム「主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリア」
@東京大学(2020/1/13)

卒業生調査の結果から見た東大附属卒業生のキャリア

「探究的で協働的な学び」はキャリアの役に立つか？

東京大学大学院教育学研究科
比較教育社会学コース 修士課程1年
荒木真歩・田垣内義浩

Slide 1

発表の流れ

1. 附属での「学び」とキャリア
2. 分析方法
3. 分析からわかったこと (1)
4. 分析からわかったこと (2)
5. まとめ

Slide 2

1. 附属での「学び」とキャリア

分析に先立ち、これまで学校での学びと将来のキャリアの関連がどのように研究されてきたのかということ概観していきたいと思います（Slide 3）。

1. 附属での「学び」とキャリア

Slide 3

学校での学びは、将来のキャリアに対して効果があるのでしょうか（Slide 4）。皆さんの中にも、学校での学びや学習はその後の人生にとって意味があるのか、あるとしたら、そこからどういった効果が見いだされるのかということに疑問や関心を持つ方もいるかと思います。答えは人それぞれだと思いますが、例えば、高校のときの恩師が素敵だったから学校の先生になったといったことが具体的に想定されるのではないかと思います。

学校での学びが持つ「効果」とは？

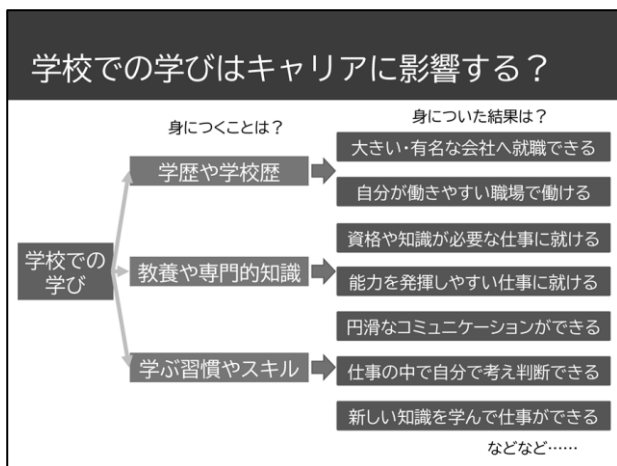
- 「学校での学びは、その後の人生に影響するか？」
- きっと答えは人それぞれですが……
 - 「恩師が素敵だったから学校の先生になりました！」とか
 - 「勉強した内容を生かした仕事につきました」とか
- 教育社会学という分野には、「**学校での学びと仕事の関係性**」に着目したさまざまな研究がある。
 - 学歴や学校歴と就職先(天野 1984)(潮木 1987)、転職先(濱中・羽谷 2000)の関係
 - 学校で学んだ内容と仕事内容の関係(本田編 2018)
 - 収入や収益率に与える学歴や学校歴(小杉 2017)、専攻(岩村 1996)の影響

Slide 4

われわれが専攻している教育社会学の分野では、学校での学びと仕事の関係性に着目したさまざまな研究が取り組まれています。例えば高卒や大卒といった学歴と、東京大学卒や早稲田大学卒といった学校歴と、就職先や転職先には関係があるのかということが検討されてきました。

そのような研究を踏まえて、学校での学びと将来

のキャリアに関係があるのかということ、私たちに考えて整理したものが Slide 5 の図です。まず、学校での学びによって学歴や学校歴が身に付き、その結果、大企業や有名な企業に就職できるのではないということが想定されます。



Slide 5

また、学校での学びによって教養や専門的知識が身に付くことで、資格や知識が必要な医師や弁護士などの仕事に就けるのではないかと考えられます。

最後に、学校での学びによって学ぶ習慣やスキルが身に付くことで、仕事の中で自分で考えて判断できるようになるという結果が想定できるのではないかと思います。

東大附属での学びが将来のキャリアに影響を与えるのかどうかを検討する際にわれわれが着目したのは、附属特有の探究的で協働的な学びです (Slide 6)。探究的で協働的な学びというのは、佐藤学先生の「学びの共同体」に影響を受けた実践で、教科学習では生徒同士で互いに学び合うグループ学習を実践し、総合学習ではフィールドワークや課題別学習を実践しているという特徴があります。そして、附属での学びの総まとめとして卒業研究が取り組まれています。これらに共通していることは、生徒たちが教室で机を前に向けて教師が一方向的に教えるというスタイルではなく、生徒が自ら学ぶ方法を自然に身に付けることができる学習スタイルだということです。

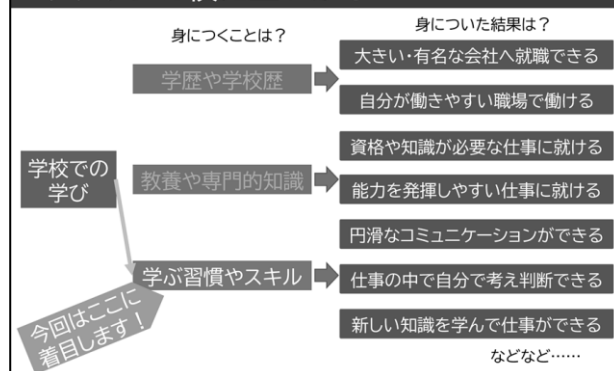
東大附属特有の「探究的で共同的な学び」

- 「探究的で共同的な学び」 ← 「学びの共同体」
 - 教科学習
 - 少人数制の授業
 - 互いに高めあうグループ学習
 - 総合学習
 - フィールドワーク， 教員との密な連携
 - 「課題別学習」
 - 総まとめの「卒業研究」
- いずれも教室で机の前に座って先生から教わり続けるだけではなく、自ら学ぶ方法を身に着ける学習スタイル

Slide 6

附属での探究的で協働的な学びを経験することで、自ら学ぶ習慣やスキルが形成され、その結果、仕事の中で自分で考え判断できるスキルが将来のキャリアにおいて生かされているのではないかとわれわれは想定しました (Slide 7)。

東大附属の「探究的で共同的な学び」はキャリアの役に立つか？

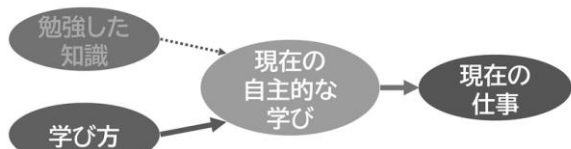


Slide 7

以上のことを検証するためにわれわれが先行研究から参考にしたのは、「学び習慣仮説」です (Slide 8)。学び習慣仮説は矢野眞和先生が検証したもので、学び方が収入に影響するメカニズムを考える仮説です。勉強した知識というよりも、大学で身に付けた学び方そのものが職場での知識や学び方を規定し、ひいては賃金を規定するのではないかとという考え方です。

「学び習慣仮説」とは？

- 学び方が収入に影響するメカニズムを考える仮説。
- 大学で身に着けた学び方が、職場での知識や学び方を規定し、さらに賃金を規定する、という考え方。
(矢野 2009)
- 文理に関わらず説明できる。(濱中 2012)



Slide 8

これを東大附属バージョンで考えてみると、東大附属という中等教育機関ならではの探究的・協働的で深い学びも、その後に進学した学校での学び方や就職後の自主的な学習を通じて、現在の仕事に影響しているのではないかと考えることができます (Slide 9)。

東大附属版「学び習慣仮説」を考える

- 東大附属ならではの「探究的・共同的で深い学び」は、その後に進学した学校での学び方や、就職後の自主的な学習を通じて現在の仕事に影響している？



Slide 9

2. 分析方法

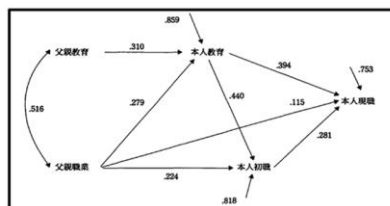
2. 分析方法

以上のことを検証するために、パス解析という分析方法を用いました。パス解析は、三つ以上の変数の関係を図と数値で表現することで、変数同士の相関関係や因果関係を分析する手法です。Slide 10 の図を用いて説明すると、例えば父親の社会的地位と子どもの地位の関連を検討する際に、単純にその二者間の関連を検討するよりも、その間に媒介しているものが何なのかを検討するものです。この例であれば子どもの教育年数や初職ということになります。何を經由 (パス) して効果を及ぼしているのかを検証できる点が、パス解析の特徴であり利点です。矢印は、どこからどこに影響しているのかという影響先を示しています。

分析方法

• 「パス解析」

- 3つ以上の変数の関係を図と数値で表現することで、変数同士の相関関係や因果関係を分析する。
- 例「父親の社会的地位が子どもの地位に影響する」



神林(2006)によるBlau&Duncan(1967)「地位達成モデル」の図

Slide 10

パス解析を用いて今回確かめたのは、東大附属で

の学びが進学先での学びの経験に効果を及ぼしているのかどうか、附属での学びが直接的・間接的に現在の学び習慣に影響しているのかどうか、その習慣が今の収入や仕事の自律性に影響しているのかどうかということです (Slide 11)。使用した調査は「学びと仕事の東大附属卒業生調査」で、今回は主に「学びの共同体」が始まった2005年度以降の卒業生を対象としました (Slide 12)。分析で使用した質問項目は、附属での学びの経験、大学進学後の学習経験、現在の学習習慣、現在の仕事の自律性と収入です (Slide 13、14)。

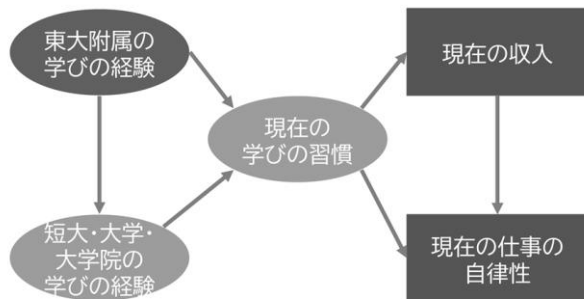
分析で使用した質問項目

- 附属での学びの経験
 - 附属の特別学習／卒業研究・課題別学習における学び方
→当時身に着けた「学び方」に関する得点を合算
例)「本や新聞などを読む」「インターネットで調べる」
- 大学進学後の学習経験
 - 授業における学び方に対する自己評価
→学習の取り組みへの熱心さ、成績
例)「一般教養科目・専門科目に熱心に取り組んでいた」
 - 卒業研究における学び方に対する自己評価
→卒業研究の取り組みへの熱心さ、成績、取り組んだ内容
例)「自分で研究を進めることができた」「十分な内容の論文やレポートができた」
(※詳しくはお手元の資料をご覧ください)

Slide 13

今回確かめたいこと

- 今回の分析では以下の図を検討する。



Slide 11

分析で使用した質問項目

- 現在の学習習慣
 - 現在の学習習慣の有無
例)「かなり頭を使わなければ達成されないようなことを目標にすることが多い」
 - 現在の自主的な学習への姿勢
例)「生涯にわたり新しいことを学び続けたい」
- 現在の仕事の自律性と収入
 - 自律性、主体性、仕事へのやりがいを合成
例)「自分の能力を発揮できる」「自分の仕事の内容やペースを自分で決められる」「やりがいを感じる」
 - 現在の本人の年収 (対数変換済)
(※詳しくはお手元の資料をご覧ください)

Slide 14

使用した調査

- 「学びと仕事の東大附属卒業生調査」
 - 2017年に実施
 - 東大附属の卒業生のべ5000人以上
 - 以下の内容について質問
 - 出身家庭について
 - 附属での学習経験
 - 上級学校進学後の学習経験、学習内容
 - 就職先や就職後の働き方
 - 今回の分析対象は、「学びの共同体」が始まった2005年度以降の卒業生を対象とする。

Slide 12

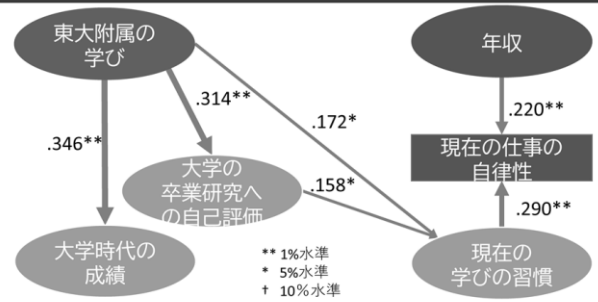
3. 分析から分かったこと—「学び」の効果はあるのか—

(荒木) 分析結果を説明します (Slide 15)。まずは、仕事の自律性に対する学びの効果です。Slide 16 は、左上が東大附属での学びの経験で、その下の大学の卒業研究への自己評価や大学時代の成績、右下の現在の学びの習慣、そして現在の仕事の自律性へとつながるようになっていきます。東大附属の学びが直接的に今の仕事の自律性を規定しているかということ、ご覧のとおり矢印がないので、直接規定しているわけではありません。では何が影響しているかということ、進学先の大学での卒業研究の自己評価と現在の学びの習慣です。東大附属での自分から学んでいく姿勢が大学でも生かされ、それが現在の学びの習慣につながっているということが分かります。

3. 分析からわかったこと (1) —「学び」の効果はあるのか—

Slide 15

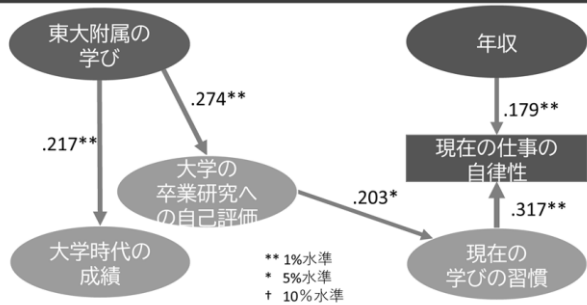
人文・社会科学系の仕事の自律性



人文・社会科学系の場合は、大学での学び経験やその後の学びの習慣を通して影響する。

Slide 17

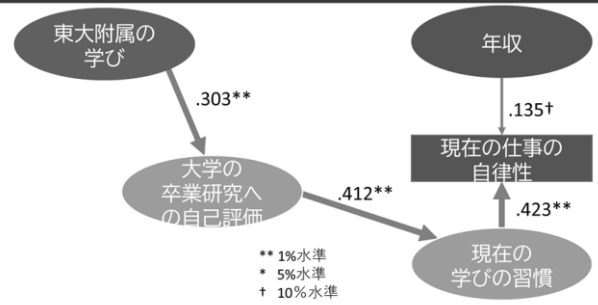
仕事の自律性に対する「学び」の効果



東大附属での学びは、大学での学び経験や、その後の学びの習慣を通して仕事の自律性に影響する。

Slide 16

自然科学系専攻の仕事の自律性



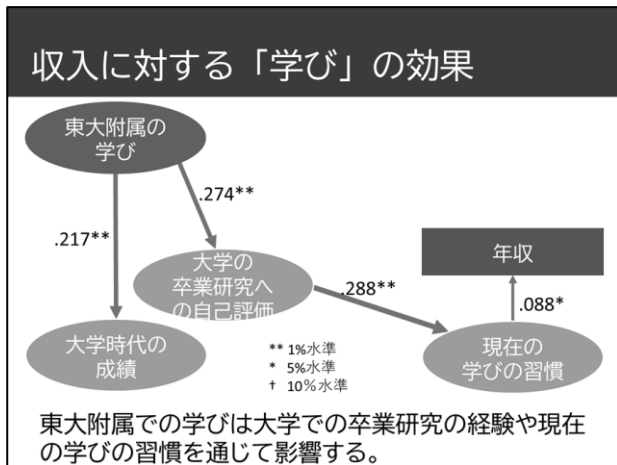
自然科学系の場合は、東大附属での学びは大学での卒業研究の経験を通じて影響する。

Slide 18

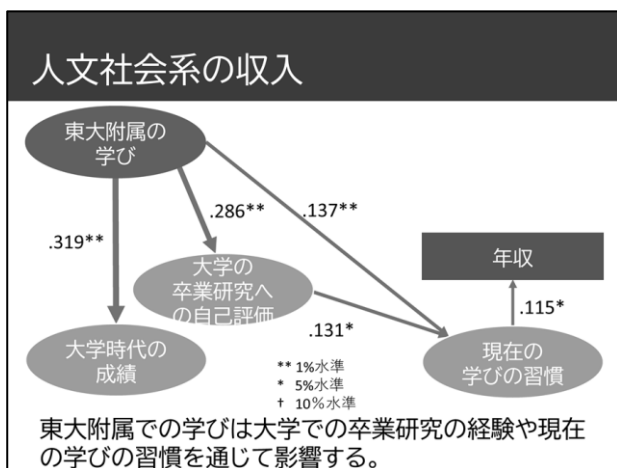
これを文系・理系で分けて、まず人文・社会科学系だとどうなるかというのが Slide 17 です。今度は、東大附属の学びが直接的に現在の学びの習慣につながっています。また、先ほどと同じように大学の卒業研究への自己評価が間に挟まり、現在の学びの習慣、現在の仕事の自律性というふうにつながっていることも分かります。一方で理系の場合は、東大附属での学びが大学の卒業研究への自己評価、現在の学びの習慣、現在の仕事の自律性へとつながっていきます (Slide 18)。

以上のことから、文系であっても理系であっても、東大附属での学びが現在の仕事の自律性に間接的に結び付いていて、学び続けるという姿勢が大事だということが分かります。

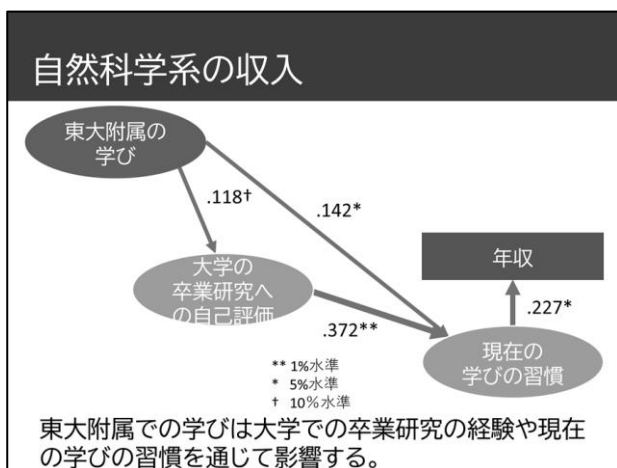
次に、収入に対する学びの効果を検討してみました。これも自律性とあまり変わらず、東大附属での学びが、卒業研究への自己評価、現在の学びの習慣、そして年収に結び付いていくということが分かりました (Slide 19)。人文社会系と自然科学系で見ても同じような形でした (Slide 20、21)。以上のことから、東大附属での学びは、その先も学び続ける習慣が身に付き、現在の仕事や収入に結び付いていくということが分かりました。



Slide 19



Slide 20



Slide 21

4. 分析から分かったこと—誰が「学び」の効果を獲得するのか—

ここまでくると、東大附属の在校生や卒業生はうれしい気持ちになるかもしれませんが、では誰が学

びの効果を獲得するのかということをもう少し考えてみたいと思います (Slide 22)。

4. 分析からわかったこと (2) —誰が「学び」の効果を獲得するのか—

Slide 22

東大附属での学びは、その後のキャリアに影響を及ぼす可能性があります。ただ、少し意地悪な私は、東大附属での学びというよりは、そもそも東大附属に入学できるような学力の効果なのではないかと考えてしまいました (Slide 23)。東大附属の方は皆さんあまり受験らしい受験ではないと言うのですが、入学できる方はある程度の能力が保証されていると考えたときに、学びの共同体や探究的で協働的な学びを経験していなくても、実は学び習慣は身に付くのではないかと考えました (Slide 24)。しかし、この調査は他の学校で同じように実施しているわけではないので、他の学校出身者との比較ができません。そこで、2005年以前の、探究的で協働的な学びを経験していない東大附属の卒業生と比較してみました。

誰が「学び」の効果を獲得するのか？

- 東大附属での「学び」は、その後のキャリアに影響を及ぼす可能性がある。
- ここで出てきた (とても意地悪な) 疑問
東大附属での「学び」というよりは、
東大附属に入学できる学力の効果なのでは？

Slide 23

誰が「学び」の効果を獲得するのか？

- 疑問：選抜（いわゆる「受験」）を経験し、学力が身につけているのであれば、「学びの共同体」「探究的で共同的な学び」を経験していなくても「学び習慣」が身につけているのでは？

(1) 東大附属と同じ難易度の学校出身者と比較する

(2) 東大附属出身で、「探究的で共同的な学び」を経験していない人（≒2005年以前の卒業生）と比較する

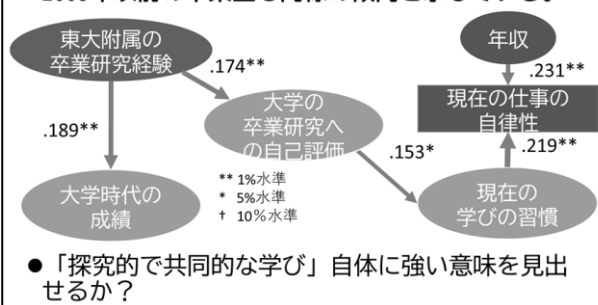
今回はここに
着目します！

Slide 24

その結果、先ほどの図と同じような形が見えてきました (Slide 25)。2005年以前の卒業生も卒業研究をしているので、そこから大学の卒業研究への自己評価、現在の学びの習慣、現在の仕事の自律性に結び付いていくということです。ですから、探究的で協働的な学び自体を強調するというよりは、そもそも東大附属での卒業研究のような学ぶ姿勢が身に付いていれば同じような結果になるのではないかということが言えます。

「探究的で共同的な学び」だけが効果を持つわけではない可能性

- 「探究的で共同的な学び」を経験していない、2005年以前の卒業生も同様の傾向を示している。



Slide 25

5. まとめ

5. まとめ

以上のことから、まとめをさせていただきます (Slide 26)。東大附属での学びは、学び習慣としてキャリアに役立つ可能性があります (Slide 27)。ただ、探究的で協働的な学びが導入される 2005年より前の卒業生でも、卒業研究をしている卒業生は似たような傾向を示しました。従って、最近、東大附属以外の学校でアクティブラーニングやディープ・アクティブラーニングがはやっていて、東大附属でも昔からやっていることなのですが、それ自体は果たして手放しで賞賛していいものなのかという疑問があります。元々卒業研究というしっかりした学びがあり、それをずっと続けているからこそ今でも効果があるのではないかということを今回は少し疑問に思い、これからの研究課題にしていきたいと思いました。実証的に本当にみんなに効果があると言えるかどうかは、今後継続して検討していく必要があると思います。

Slide 26

東大附属の学びは「学び習慣」として キャリアに役立つ (かも)。しかし……

- 東大附属での学びは、「学び習慣」としてキャリアに役立つ可能性がある。
- 但し「探究的で協働的な学び」が導入される2005年前の東大附属出身者であっても、「卒業研究」を経験している卒業生は、似たような傾向を示す。

★東大附属における「学びの共同体」「探究的で協働的な学び」は果たして手放しに称賛してよいか？

★実証的に「効果がある」といえるかを、これから継続して検討する必要がある。

Slide 27

Thank you for your attention!!

謝辞

- 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターと東京大学教育学部附属中等教育学校の共同プロジェクト「附属学校データベースプロジェクト」から「学びと仕事の東大附属卒業生調査」の個票データの提供を受けました。

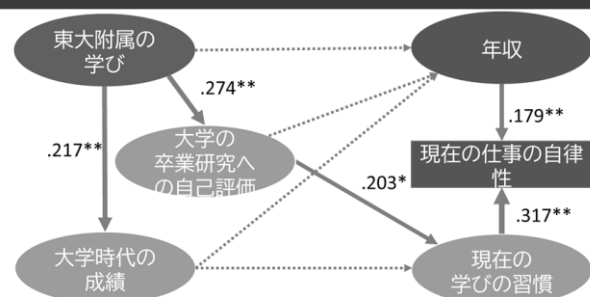
東京大学教育学部附属中等教育学校ならびに同窓会の皆さま（特に調査に協力いただいた方）に深く御礼申し上げます。

Appendix

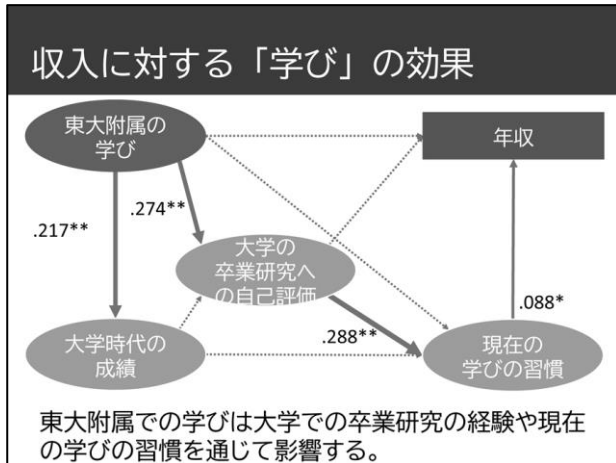
参考文献

- 濱中淳子, 2012, 「『大学教育の効用』再考—文系領域における学び習慣仮説の検証」『大学論集』43:189-205.
- 濱中義隆・苅谷剛彦, 2000, 「教育と職業のリンケージ労働市場の分節化と学歴の効用」近藤博之(編)『戦後日本の教育社会日本の階層システム3』東京大学出版会, 79-103.
- 岩村美智恵, 1996, 「高等教育の私的収益率」『教育社会学研究』58:5-28.
- 苅谷剛彦, 2012, 『学力と階層』, 朝日新聞出版.
- 小杉礼子, 2017, 「大卒者の仕事の変容」『高等教育研究』20:71-92.
- 神林博史, 2006, 「2-8 社会的地位はどのように形成されるか—3つ以上の変数の因果関係をモデル化し関係の強さを調べる」数理社会学会(編)『社会の見方、測り方』, 勁草書房
- 矢野眞和, 2009, 「教育と労働と社会—教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』588:5-15.

仕事の自律性に対する「学び」の効果



東大附属での学びは、大学での学び経験や、その後の学びの習慣を通して仕事の自律性に影響する。



質疑応答

(Q1) 東大附属の60回生です。現在の仕事の自律性に関して質問があります。社会に出る方は大体が企業に属していると思いますが、その中で、例えば自分が行きたくない部署に配属されたり、自分が思い描いているキャリアではないところで働いている方は、東大附属で学んだバックボーンがあったとしても、自分の仕事に対して能力を発揮できなかったり、仕事へのやりがいを感じられないなどの場合があると思います。そういったことに関しては、調査段階で処理して省くようなことはされているのでしょうか。

(荒木) どれだけ職場にフィットしているかというようなことは、今回の質問の中では聞いていません。あくまで「自分の能力が発揮できる」「仕事の内容やペースを自分で決められる」「やりがいを感じる」と答えた得点を全て合成して分析しています。個人個人がどう思っているか、自分に合っていないところに行ったらどうなるかということは、今回は検討できていません。

ただ、少し付け加えるとすれば、自営業や専門職の方は、やはり自分でやりたいことややりがいを持っているようで、自律性や収入の得点が非常に高い傾向にありました。

(Q1) ありがとうございます。私はメーカーで設計をしていて、私の同期も専門的な知識を持って会社に入ってきた人がほとんどなのですが、聞いてみると、「実際に配属されてみたら全然やりたい仕事ではなかった」という声が結構多いです。自営の方は自分のやりたい仕事をしているのかもしれませんが、一概に専門だからというくりよりは、もう少し考慮していただくと、有意義な結果が得られるのではないかと思います。

(荒木) 企業規模は聞いているので、もしかすると、大企業に絞って分析したら少し違いがあるかもしれません。

(Q2) 慶應義塾大学の学生です。実証的に効果があると言えるかを今後分析する必要があるというまとめでしたが、例えば、実際に自分が経験してきた教育というのは、結果的にそれしか経験していないので、それを経て今の自分があると当然思って、効果があると信じてしまう側面もあると思います。そういった要素を今後どのように取り除くかという展望はあるのでしょうか。

(荒木) 最後のアウトカムをどこに設定するのか、どういう結果が出たら効果があると言えるのかという話になると思います。調査の中では、効果があると思ったかどうかを回答してもらう質問もあったのですが、今回は全部省いています。今回はあくまで自律性や年収など、客観的なもので見えています。

今後は、アクティブラーニングや探究的で協働的な学びを、できるだけ定量的に測れる指標を私たちが含めて皆さんで合意して測っていく必要があるのではないかと思います。もちろん教育というのは、自分の体験が豊かになったというような質的なところも重要ですが、それだけではなくて、定量的にどのような効果があったのか、どのような効果があることにするのかというところで合意を図った上で調査を

進めていくことが大事ではないかと思えます。

(白水) 東大附属の学びによってどういう力が身に付くのかということに興味を持って本日のシンポジウムに参加しましたが、荒木先生の発表を聞いて、東大附属での学びというよりは東大附属に入学できる学力の効果なのではということに注目されたことがとても素晴らしいと思いました。川本先生の発表によると、一般の中高生は学力やモチベーションのレンジがものすごく広い一方で、東大附属は偏差値教育では測れない、あるいは単なる知識の詰め込みではない教育をしているということなので、逆に偏差値や学力が高いといわれている学校との比較が必要になってくると思いました。単に自分たちがどう認識したかではなく、学んだ内容をどう生かしたかを調べるのであれば、今まで偏差値教育で教育をしてきて成果があると考えている学校との比較をすべきではないかと思いました。これは荒木先生というよりも、今回のプロジェクトのメンバーの皆さまに對しての意見です。

(秋田) 東大の秋田です。東大附属は特別の卒業研究や課題別学習にも力を入れています、大半の時間は教科の学習をしていて、その質も大変高いです。そこでも先生方がいろいろな挑戦をしてくださっているということが残念ながら記憶に残っていないことが分かりましたが、先生方が教科でも工夫して探究的な学習をされていることはとても意義のあることだと思います。ですから、今回分析に使用した質問項目は卒業研究等に特化していますが、本当はどちらかが効くのか、あるいは加算的に効くのかということを見えていただくことが大事です。

それから、「学びの共同体」の哲学は、自ら学ぶ学び方のスタイルを身に付けるということではなく、聞き合い、支え合う関係をクラスや学年で作っていくという関係論的な発想であり、個別の資質能力を身に付けるというものとは基本的な哲学が違ってきます。引用文献もないので、佐藤学が聞いたら大き

な誤解だと思ってしまうので一言だけ付け加えさせていただきます。

東大の教育学研究科で学ぶなら、歴史的に附属の先生が何に取り組んできたかを学んでいただけるとありがたいと思いました。

(浅川) 附属学校で教員をしている浅川です。探究的な学びは、1961年以降、卒業研究や課題別学習を通して連綿と展開されてきました。2005年からは、全ての教科学習において、それまで行われていた黒板を背に教員が生徒に一方的に説明して進めるような授業を一切やめて、生徒同士が向き合って一つのテーマについて語り合うことを中心にしていこうというふうになりました。もちろん、その初期段階においては、それまでの染み付いた授業スタイルから離れることができず、試行錯誤しながら、恐らく2010年ごろから何となくこれでいけるのではないかという感じを持ちはじめたのだと思います。共同的な学びとは何かということも、私たちは学校の中では「協働」という字を使っているのですが、そのあたりのことをもう少し整理すると、きっと分析の手法も変わってくるのではないかと思います、今後ぜひそこをやっていきたくと思いました。

コメント

(山本奈緒子) 東大附属学校を2004年に卒業した52回生の山本と申します。現在は保健体育科の教員です。私が在学していたときはまだ「学びの共同体」のコの字型学習などは取り入れられていませんでしたが、総合学習や卒業研究など探究的な学びは確立していました。その学びが卒業後に生きているかということ、私に関しては120%生きていると思います。100%以上なのは、自分で経験したことを生徒にそのまま教えることができるからです。また、今はちょうど5~6年生の卒業研究のために4年生が必死にはんこ回りをしている最中です。「研究内容、方法とも見通しが充分持てるね」という教員の承認印を三

つもらえないと卒業研究がスタートできないということで、生徒が個々にアポイントメントを取り、先生方のところに行ってプレゼンテーションを繰り返しています。そういう力は今後にすごく生きていくと思います。

私は学校の広報を担当していて、受験生の保護者に学校の説明をすることがあります。そのときに卒業生からのコメントとして、在学中どういうことが良かったか、今に生きていることは何かということを集約する機会がありました。文章をまとめ発表する力、自分自身を表現する力がすごく付いたという回答が多く、付かなかったのは暗記する能力という回答がすごく印象的でした。高レベルの大学に進学したら周りの人たちの知識がすごく、何か問題を解くときに、自分は一生懸命考え抜いて解こうとするけれども、周りの人は頭に入っている公式を使って簡単に解くので、知識や暗記力が乏しいことに焦りを感じたそうです。ただ、何かプレゼンテーションをするといったときには、周りの人たちは「こちらのレジュメをご覧ください」というセリフまで一字一句暗記してくるので、先生方からの質問にまともに答えられないのですが、暗記力がないという彼は、中高時代にいつも想定外の質問を受けていたので、余裕で対応できるのだそうです。

まさに先日、高校2年生の卒業研究中間発表があったのですが、高校1年生からの質問が飛び交っていました。核心を突いた質問をする生徒もいて、それに対して返さないといけないので、適応能力が卒業生には付いていて、そういったところが社会的にもすごく役に立つのだと感じました。今回も4名の卒業生が登壇しましたが、割と軽い感じで発表を頼まれて、快諾してくださったのではないかと思います。一般的に、東大のシンポジウムでの登壇を頼まれると、自分で大丈夫なのだろうか、原稿はどうしようか、何を聞かれるのだろうか、結構どきどきすると思いますが、そういったところも附属を卒業しているからこそすんなりできるのではないかと思います。

(清野) 本校数学科の教員で58回生の清野と申します。私は本校の卒業生として、東大附属の教育はとても良かったという印象があります。その良かった経験を自分の生徒たちにもしてもらいたいと思い、どうすればそれが豊かに保障できるのか、日々悩みながら生活しています。

良かったと思うことは本当にたくさんあるのですが、一つは、卒業生の皆さんや山本先生がおっしゃったように、何かしようと思ったときの敷居がとても低いことです。私自身、何か分からないことがあったら、取りあえずやってみよう、きっとその方が面白いという行動原理があり、それはすごく良い教育を受けたからだろうと実感しています。

東大附属では、例えば生徒が教員に相談してきたときに、頭ごなしに否定することはありません。自分でテーマを決める総合学習で、たとえばかなり背伸びしたテーマでも「面白いね。それってどういうことだろう。取りあえずやってみようか」とおっしゃる先生が多いですし、私自身も、少し難しいことでも一緒に悩めばいいと思い、「取りあえずやってみようか」と言うことがあります。行事での生徒企画など、実現が本当に難しいときでも、それってどういうことだろう、本当にやりたいことって何だろう、やりたいことを実現させるためにはどうすればいいだろうということを教員と一緒に考えてくれることは大きいと思います。

教員だけでなく、生徒同士もたくさん話しています。日々やりたいことをたくさん話し、その中の一部を教員に話すという雰囲気がとてもいいと思います。なぜたくさん話すかという、やることが非常に多いからです。一般的な中高生に比べて一つ一つの課題も重いのに、個数も多いので日々いろいろなことを考え、常に何かしています。個人で取り組むものだけでなく係や委員会活動や行事などが活発で、その時々で関わっている小グループもたくさんあるのです。その中でたくさん話をして、教員にも一緒に考えてもらえるという経験を6年間積んできたから、

その後も好奇心を失わずに生活を送ることができるのではないかと思います。

私自身、それは自分の血肉になっていると思うので、今後教育を続けていく上で、生徒に対して同じようにたくさん話して、生徒同士にもたくさん話してもらい、私も一緒に考えて歩んでいきたいと考えています。

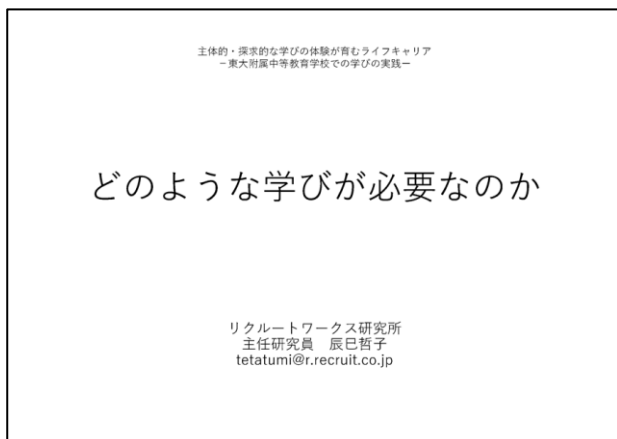
指定討論

「どのような学びが必要なのか」

辰巳 哲子(リクルートワークス研究所主任研究員)

1. はじめに

今日は、川本先生から、どのような学びが学校時代に必要なのかということをご話してほしいという話を頂き、こちらに参りました (Slide 1)。テクノロジーの進化で学習がすごく変わってきているといわれており、私は去年、一昨年と、社会人の学びやラーニングテクノロジーの研究をしてきました。今日は、その知見から皆さんに紹介したい点をお話しし、後半では研究の内容について少し触れていきたいと思います。



Slide 1

2. 21 世紀の学び

ラーニングテクノロジーのカンファレンスで共有された話題をお話ししたいと思います。テクノロジーの影響を受けて 21 世紀のワークとライフはどうなっていくのかということが議論されました。ナレッジやインフォメーションは Google で検索するようになり、タクシーは Uber になり、コミュニケーションは LINE や Twitter に変わってきています。このように、テクノロジーの影響を受けてこれまでの行為がどのように変わってきているかという議論があったのですが、その中で難しいのがラーニングだという話がありました。

なぜラーニングが難しいのか、というところ

グという言葉は多義的であるからです。われわれもワークス研究所の中で、大人を対象に、今学んでいるかどうか、どのような学びをしているかという質問をすることが多いのですが、「学びってどの範囲のことをいうの?」「勉強はしていない。本は読んでいられるけれども、それは学びと呼んでいいの?」「ググったりするけど、それは学びではないよね」という反応が返ってきます。

このように、学びの範囲は、個人によってすごく多様になってきているように思います。従って、調査をしていく中では、「学び」といったときにどのような学びのことをいっているのかということについて、多様な学びが存在していることを前提に考えなければならぬと考えています。

では、テクノロジーが進化する中で、学びはどのように多様になってきているのか。先ほどのご発表の中で、学習習慣仮説という話がありました。学校時代の学習習慣が、そのまま報酬に影響しているのではなく、実はそれが社会人になってからの学習習慣に影響し、それが報酬に影響しているのだというモデルです。そのモデルを提案した矢野先生と一緒にわれわれは現在、社会人の学びについてのプロジェクトを進めていて、その中で、学びには 4 種類があるという仮説で考えてみようではないかという議論をしています。

Slide 3 は、自分と他者間の対話型学びについて説明したものです。モデル 1 は、自分は知っているが他者は知らないという内容で、対話の形式としては教授や啓蒙が考えられます。モデル 2 は、自分は知らないが他者が知っているという内容で、これは狭義の学習が考えられます。モデル 3 は、自分も他者も知らないという内容で、探求・研究が考えられます。モデル 4 は、お互いに知っている気になっている内容です。知っていると思っていたことも環境の変化にあわせてどんどん変わっていきます。そのときに、お互いに知っていると思っていた常識を懐疑的に見ていくということが考えられます。

学びの4類型

	自己	他者	自己からみた対話の形式
モデル1	○ (知っている)	× (知らない)	教授/啓蒙
モデル2	× (知らない)	○ (知っている)	学習 (狭義)
モデル3	× (知らない)	× (知らない)	探求・研究
モデル4	○ (知っている)	○ (知っている)	常識=懐疑/批判的思考

参考資料: 矢野 (2019)

Slide 3

とても難しいのがモデル3とモデル4です。この二つは、学校において集団で学んでいく中で身に付けていく力ではないかと思われます。もちろん教科の授業の中でモデル1~4を学んでいる部分もあると思いますが、社会人の学びという観点で見たときには、モデル3とモデル4が非常に大事な学びであり、この二つの学び方というのが、実は学校に対して求めていきたい学び方ではないかと思ひます。

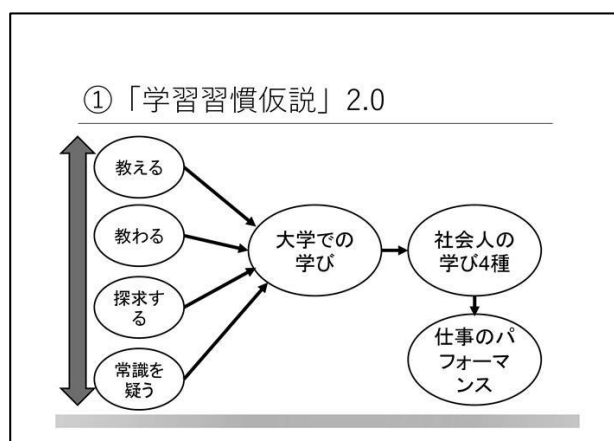
私自身も別の大学で教えているのですが、学生を見ていると、答えがあるのだったら先に教えてください、やり方や常識があるのだったら先に教えてくださいという人が多いです。学生からそう言われたときに、まずはもちろん自分で考えてもらうようにするのですが、彼らは自分で答えを見つけたり問いを立てたりすることよりも、すごく効率良く勉強したいと思っています。それこそテクノロジーの影響もあると思ひます。そこで一度立ち止まり、ここは自分で問いを考える場なので、対話を通して自分で問いを立てていきましょうということを毎回伝えています。

毎回伝えているのですが、理解してもらうことはすごく難しいです。なぜかという、きっと彼らは大学に入ってくる前の学習の中で、効率の良い学び方をしてきているからです。自分で問いを立てて考えるということはその後ずっと続いていくのですが、彼らはきっと社会人になってからも、答えありきで何かを学んだり仕事をしたりするでしょう。その癖を取ることはすごく大変なのです。

ですから、今日の東大附属での学びについての発表を聞いていて、自分で問いを立てることを学んだり、自分から行かないと何も得られないことに気付いたりしていることが素晴らしいと思ひました。それを社会人になる前に身に付けておくことが本当に大事だと思ひます。

3. 学習習慣仮説 2.0

学習習慣仮説を矢野先生が提案されたのは結構前のことなので、そろそろもうワンステップ進めてもらえませんかという提案がSlide4です。例えば学校段階で、先ほどの四つのモデルに沿った学習をして、社会人になってからその学びをどのように自分でマネジメントして仕事のパフォーマンスにつなげていけるのかという研究に進めていただくことはできないだろうかと思ひています。



Slide 4

また、最近私が特に思ひるのは、ネットでさまざまな情報が得られる時代に、学校という場にわざわざ行って学ぶことにどういう意味があるのかということです (Slide 5)。その答えを見つけるには、学校においてどのような経験の場を作るか、いろいろな学習の機会を通してどうやって個人の中に気付きを与えていくか、どのように経験からの学びを促進するかを考える必要があると思ひます。

学校という「場」からの学び

場とは、

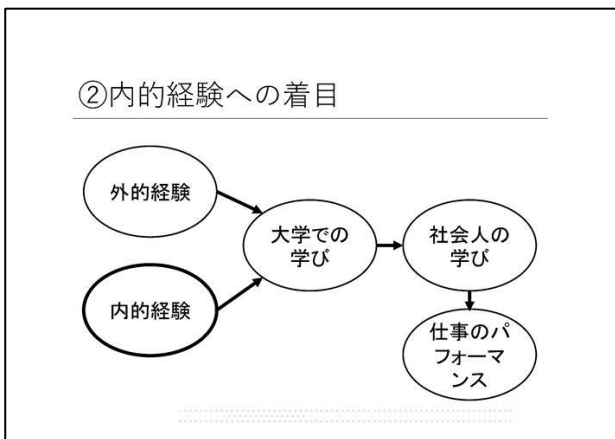
- ・人々がそこに参加し、
- ・意識・無意識のうちに相互に観察し、
- ・コミュニケーションを行い、
- ・相互に理解し、
- ・相互に心理的刺激をする、
- ・その状況の枠組みのことである（伊丹，2005）

(1) どのような（外的）経験の場を作るか

(2) どのように経験からの学び（内的経験）を促進するか

Slide 5

つまり、同じ経験をしていても、それが自分の中で学びになっている人もいれば、なっていない人もいて、それをどのように自分自身の中で学びとして認識できるかということです。例えば、先ほど水落さんが発表の中で、やることもやらずに権利ばかり主張することは通用しないのだと学んだとおっしゃいました。これは内的経験になると思います。同じように特別学習をしていても、その中で学ぶことは個々で変わってくるわけです。この内部経験への着目をぜひ検討いただけないかと思っています（Slide 6）。先ほど数量的な分析を中心にと話がありましたが、今の時代、数字だけだと見落としてしまうことが結構あるということを、私自身、自分の研究を通じて日々感じています。ぜひ、数字だけではなく質的研究もセットで、この数字にどんな文脈があるのかということを読み解くような研究成果に発展していただければと願っています。

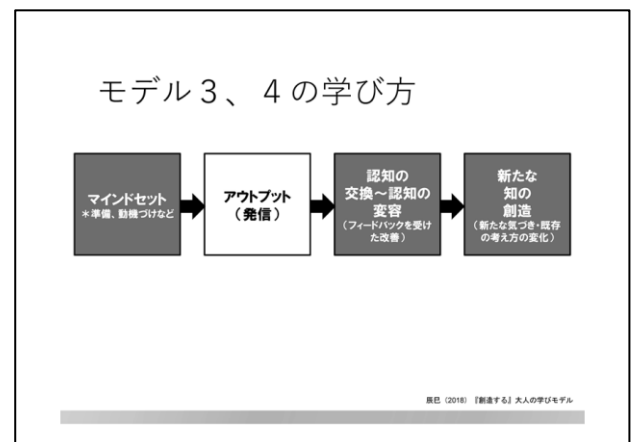


Slide 6

4. モデル3、4の学び方

先ほど難しいと申し上げたモデル3とモデル4の学び方について、去年、私どもは報告書をリリースしました。モデル3とモデル4は、対話をしながら共同的に学んでいくしかないのだろうと考えています。

社会人の学びというのは、まずマインドセットがあり、その後にアウトプット（一人一人が持つ知識や経験の発信）があり、アウトプットの後に認知の交換をして、そして新しい知を創造していくという流れがあるかと思います（Slide 7）。



Slide 7

このマインドセットやアウトプットの部分で、自分の考えをやりとりするのが難しい社会人が結構いると思います。東大附属ではもう既にされていると思いますが、ぜひ今後も、アウトプットした上でその後の学びが進むような教育活動を進めていただければと思います。

最後に、Slide 8 はマインドセットについての参考資料です。人から学べる人、人から学べない人の特徴をまとめたものです。個人が柔軟でないと、いろいろな答えや考え方を他者から学ぶことは難しいと思います。マインドセット、つまり、どういう学びの姿勢でいるかということは、社会人になってからの学びにもつながっていると思います。ぜひ、この学びの姿勢というものも調査の中で検討していただければと思います。

参考資料

マインドセット

人から学べない人には、
こんな特徴があります。



自分が他人からどう評価されるかを
気にする

他者を低く見ること
自分の優越さを証明する

失敗の原因を自分以外に求めようとする

正解を探すことに必死になる

完璧主義

一方で人から学べる人は、
こんな特徴があります。



自分を向上させることに関心を向ける

他人からの評価や失敗することを
怖れない

失敗から学ぶようとする

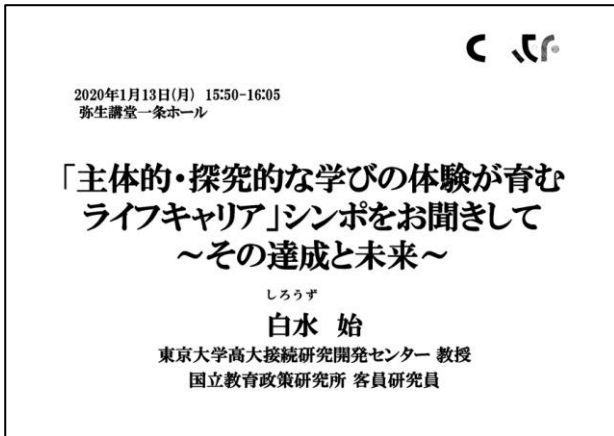
正解はないと知っている

完璧主義

参考：『MINDSET「やればできる！」の研究』2016
黒田 (2019) 『翻訳する』大人の学びを学ぼう2

Slide 8

『主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリア』シンポをお聞きして～その達成と未来～
 白水 始（高大接続研究開発センター教授）



1. はじめに

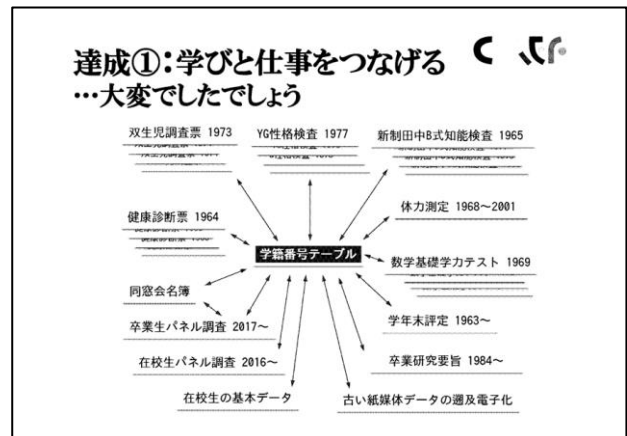
先ほどの山本先生の、附属の生徒は想定外の質問を受けてもたじろがないという話を聞いて思い出したことがあります。10年ほど前に、世界的な調査で協調的問題解決能力を測るという試みがありました。それに関連してこんな調査があってもよいなと思いました。二つのビデオを用意し、一つは、すごく流ちょうなプレゼンだけでも質疑応答になるとぼろぼろという話し手、もう一つは、プレゼンは話しながら考えるので少ししどろもどろしているけれども、質疑応答になるとしっかり考えながら話せるという話し手のビデオです。この二つのビデオを見て、どちらの人とコラボレーションしたいと思うか、ひいては、協調的問題解決能力とはどのようなイメージかを問う調査です。

もし話しながら考える力は誰にでもあり、人は話しながら考えを作り変えたり疑ったりするポテンシャルがあると考えていけば、後者の話し手がそのポテンシャルを発揮していると見ることができます。協調的問題解決能力を毎日の授業で育てようと考えたときに、そのイメージをしっかり持つことが大事だと思うのですが、結局こんな問題が実施されることはありませんでした。

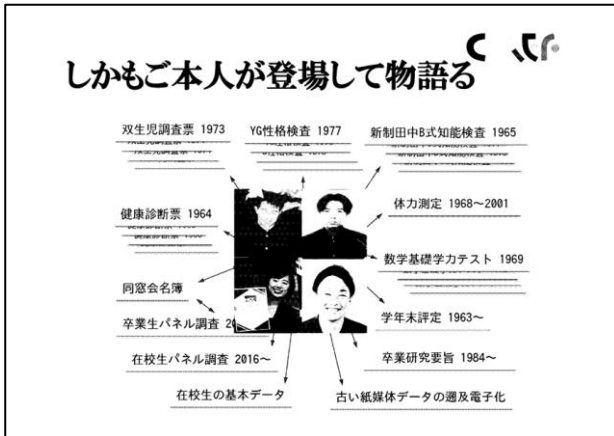
想定外の質問にたじろがず、むしろ楽しめる力をつけるといった、皆さんが行おうとしている教育やその効果の評価は簡単なことではありません。すぐに答えが出てくるものではないからです。私たちもそういう実践をしているつもりですが、日々アウェイの状態です。焦らず賢く進めていけるとよいですね。

2. 学びと仕事をつなげる

今日は、学びと仕事をつなげるパネル調査について話を伺いましたが、この調査は本当に大変だったのだと思います (Slide 1)。そもそもどういうデータがあるかを検討し、データを集めたらそれらを学籍番号でひもづけて、どのように匿名化して使うかというような、研究の前段階の処理が非常に大変で、それをなされた貢献はとても大きいと思います。しかも、今日はそのデータの紐づく結節点である本人である卒業生たちの話も聞くことができました (Slide 2)。



Slide 1



Slide 2

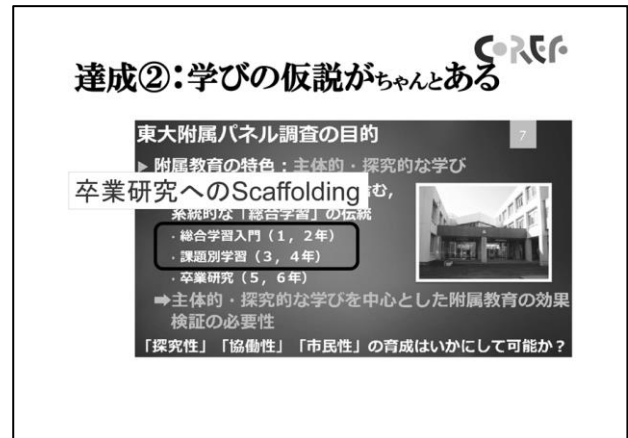
お話で印象深かったのは、在学中にいろいろな授業を受けたり、いろいろな話を聞いたりしているはずなのだけでも、本人はあまり覚えていなくて、ただ、そのときの先生が書いた通信のようなものを十数年たって読み直したときに分かることがあるということです。それを互いに聴き合くと、パネル調査を通して卒業生が学び合うという機会にもなったのではないかと思います。

3. 学びの仮説がちゃんとある

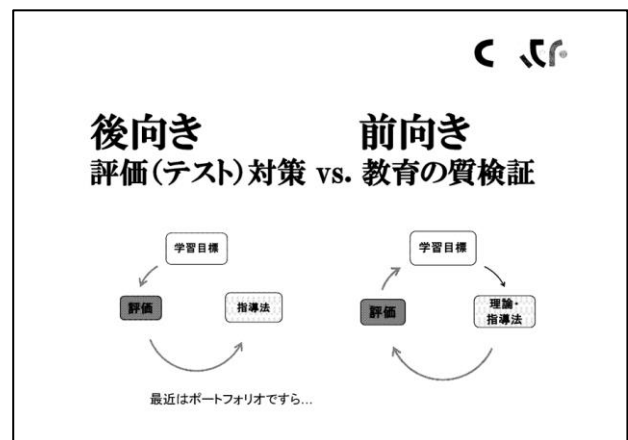
こういうパネル調査は往々にして結果を基に教育を考えがちですが、今回の取り組みの素晴らしい点は、学びの仮説があることです (Slide 3)。「卒業研究を経験しているから良いはずだ」という仮説を立てて、その効果をパネル調査で見るという機序が大事ではないかと思います。では、卒業研究は効果があるから1年生のときから取り組めばいいかということではなくて、きちんと4年間のスキヤフールド(足場)があり、その上で卒業研究に取り組むカリキュラムになっています。これは先ほどの「学力が資質・能力か」というような話に近いです。

テストの点数だけを見て、この人はこういうふう
に6年間育っているから、中高ではこういう学びがあったのではないか、それは良いことのはずだから実践しようということぐるぐる回すだけだと、テスト対策のような授業が横行してしまいます。その意味で、前向きな学習目標を設けて、ある理論に従った教え方をして、その効果を評価するサイクルに

価値が生じます (Slide 4)。



Slide 3




Slide 4

最近テストの結果だけではなく、ポートフォリオで主体性を評価する動きもあります。例えば、どれぐらい部活動にしっかり取り組んだか、生徒会のメンバーであるか、ボランティアをしたかというような活動の履歴を報告させて電子的に評価することが増えてきています。そうすると一部の現場では、うわさ話ですが、生徒会の会長の会期を短くして、なるべくたくさんの生徒が会長になれるようにしたり、部活の部長を2カ月に1回替えたりして得点を増やすという、本末転倒の教育も起こっていると聞きます。

そう考えると、田垣内さんと荒木さんがおっしゃったように、「こういうことをすると良いはずだ」という期待した効果が、実際に実践してみて本当に出ているのかを見ていくことが大事です。このパネル調査の成果をどうやって現場に附属学校に戻していくかが次の大きな課題であり、期待されるところで

はないかと思いました (Slide 5)。



未来①: 成果を現場に戻していく

**東大附属の学びは「学び習慣」として
キャリアに役立つ (かも)。しかし……**

- ・東大附属での学びは、「学び習慣」としてキャリアに役立つ可能性がある。
- ・但し「探究的で協働的な学び」が導入される2005年前の東大附属出身者であっても、「卒業研究」を経験している卒業生は、似たような傾向を示す。


★東大附属における「学びの共同体」「探究的で協働的な学び」は果たして手放しに称賛してよいか？

★実証的に「効果がある」といえるかを、これから継続して検討する必要がある。

Slide 5

4. 成果を現場に戻すために

佐藤先生の「学びの共同体」の特徴は、私の専門である学習科学の分野から見ると、制約を強く掛けずにビジョンを提示することです (Slide 6)。活動的で協働的で反省的な学びを、1 時間に 5 分でもいいし 45 分でもいいので先生の裁量に任せて行う。活動としては協調的な活動を入れるという非常に緩い制約です。しかし、ビジョンはしっかりある。そのビジョンを基に教育を考えるアプローチなので、授業者の創意工夫の余地が大きく、学校文化・同僚性の影響を受けやすいことが分かっています。ということは、今日の田垣内さんと荒木さんの発表では、「学びの共同体」の効果を十把ひとからげにして、その効果がどうかという話をしていたのですが、どの先生がいつどんな教育をした効果なのかということ掘り下げることができると、もっと深いことが見えてくるのではないかと思いました。




「学びの共同体」の特徴

- 弱制約のビジョン提示アプローチ (⇨パッケージ化アプローチ) (白水・三宅・益川, 2014; 飯窪, 2016)
- 授業者の創意工夫の余地が大きい
- 学校文化・同僚性の影響を受けやすい

⇒ 誰が、いつ、どんな教育をした効果なのか、
を捉えていくことのメリットが大きい

Slide 6

そう考えると、今回のパネル調査の成果を現場に戻していくために考えたいことが三つあると思います (Slide 7)。現場が一番課題と感じていることは何か、カリキュラム (学生の学習経験) はその課題解決にどうつながるはずか、それをどんな指標で捉えられるかです。つまり、パネルの調査結果をアクションリサーチのデータとして捉え直すことができるというのではないかと思いました。



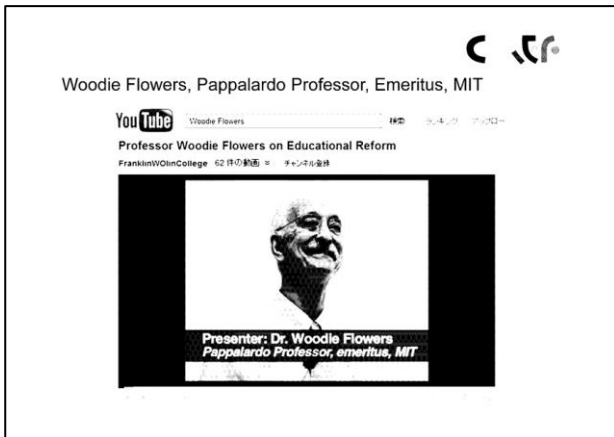
成果を現場に戻すために

- 現場が一番課題と感じていることは何か？
- カリキュラム (生徒の学習経験) はその課題解決にどうつながるはずか？
- どんな指標でとらえられるか？

= パネル調査結果をアクションリサーチのデータとして捉え直す

Slide 7

その一例として、アクティブラーニングという言葉が出てくる大元になった話を紹介します。Woodie Flowers という人が中心になり、マサチューセッツ工科大学 (MIT) の機械工学科 (mechanical engineering) を変えていったものです (Slide 8)。詳細は YouTube をご覧ください。



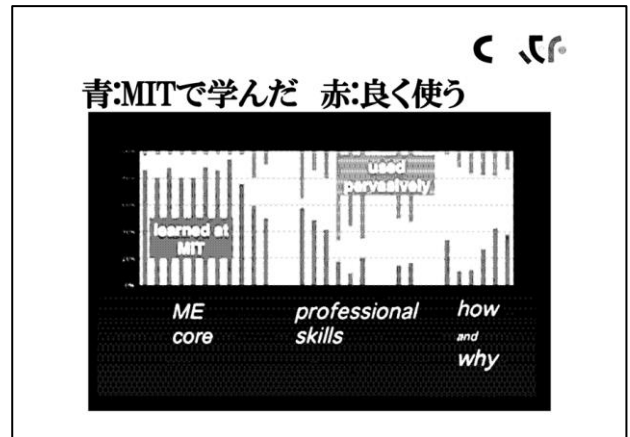
Slide 8

彼は卒業生調査を行い、MIT や仕事でどうい
 うことを学んだかという質問をしました (Slide 9)。その
 結果、機械工学の中身に関しては大学で学び、プロ
 フェSSIONALスキルや how and why は仕事の現場
 で学ぶことが多かったということが分かりました。



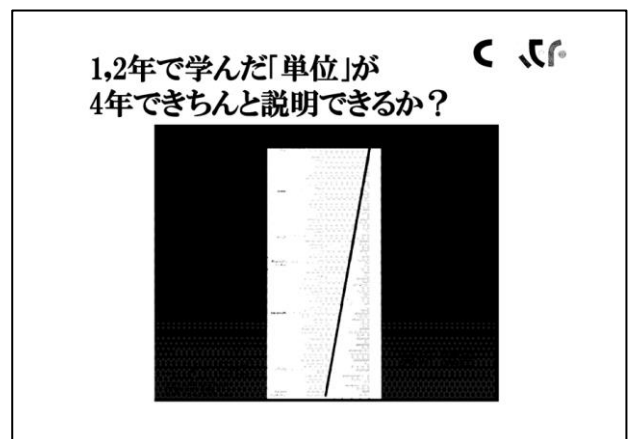
Slide 9

次に、その学びを現場で使っているかと聞いてみ
 ると、大学で学んだことは大学で学んだだけで、今
 使っているのは現場で身に付けたことが多いとい
 うことが見えてきました (Slide 10)。せっかく 4年間教
 えたのに、学生は使える形で学んでいなかったのか
 ということで、在学生調査をしました。



Slide 10

何をしたかという、1、2年で学んだ単位を4年
 生できちんと説明できるかという調査です。Slide 11
 は、斜線の左側が具体的に説明できた割合で、右側
 が知らなかったり説明できなかつたりした割合です。
 見てみると、上の方の「時間」や「力」、「重さ」に
 ついては説明できるのですが、下の方の習ったはず
 の「レイノルズ数」や「エントロピー」などは説明
 できないことが分かります。「時間」や「力」は大学
 に入る前から勉強していたことなので、一体MITは
 何の教育をしていたのかということになります。



Slide 11

従って、カリキュラムをドラスティックに変えて、
 まず教育をエデュケーションとトレーニングに大き
 く分けました。トレーニングというのは知識を頭
 に入れることで、それはウェブでも何でもリソースが
 あるので家でやればよいことです。エデュケーショ
 ンというのは、多様性の中で考えを作り替えていく
 教育です。そこで何をしたかという、MITの入学
 式当日に新入生を20人1組にして、すごく難しい課

題を14週間かけて20人のグループで6500ドルぐらいで作り上げる。具体的には森の中で電源がなくても動くプロジェクターを開発するというようなことをしました。新入生たちが誰かに相談したいときは、会場の外に先生やTAが待っていて、この人たちに聞きながら20人で何とか物事をやり遂げるということを1学期にわたって行いました (Slide 12)。

Slide 12

コース前後で進路希望を聞いてみると、コース前は、多くが花形のコンサルに行きたいという偏った希望だったのが、コース後には多様化してきて、進学するときには自分の適性をそれぞれが見つけて歩もうとしていました (Slide 13)。なぜかという、20人もいると、それぞれがグループの中で自分の役割や適性を見つけられるからです。こういう取り組みが、彼らにとっては捨てがたい教育の機会になったわけです。

Slide 13

そう考えたときに、後で議論したいこととしては、東大附属の現場では何を変えていきたいと考えてい

るか、それに対してパネル調査がどう役に立ちそうか、このパネル調査をアクションリサーチに結びつけるにはこれから何が必要かという意見を頂ければと思います (Slide 14)。

Slide 14

5. 指標を媒介に中高大社を連携する

もう一つは、指標を媒介に中・高・大・社会の連携に向かっていくことです (Slide 15)。探究性、協働性、市民性の育成はいかにして可能かというときに、この言葉を質問紙の項目や抽象的な論文に書いて終わりにするのではなく、本当に「生きて働く素質」として考えていければと考えています。例えば粘り強さという指標を、人生で迷ったときに頼りになるものとして私たちがどれだけ把握していけるか。その意味で、それぞれの指標が一体何を意味しているかという議論をこれからも続けていきたいと思えます。

Slide 15

東京大学 CoREF で、対話を通して考えを変える

授業を全国 2000 人ぐらいの先生たちと試みています (Slide 16)。子どもたちの資質・能力を引き出し、授業の中でこういう姿を見られたら、これは何々性にあたるのではないかということ考えておいて、Slide 17 のようなシートも使い、協調問題解決能力が発揮されているかどうかを一つ一つの授業で確かめながら子どもたちの育ちを見ています。

C 京大

東京大学CoREFの挑戦：

- 資質・能力を引き出す授業、接続場面や大学・社会場面における見とりの観点(=指標)の設定
 - 「見とりの観点シート」(CoREF, 2018; 翌頁)
- 実践結果の共有、教員や専門家が連携しての指標の協議

Slide 16

資質・能力 (CoREF 2018)	資質・能力が学習の中で具体的にどんなパフォーマンスの形で発揮されてほしいか/されそうかの想定(複数の発揮され方があり)
「教科等で育成したい資質・能力」のうち、本時特に育成したい/できそうなか	資質・能力が発揮されたときの子どもの具体的な姿(発言や振る舞いなど)を本時の学習内容や期待する解答の要素と結びつけて想定

Slide 17

皆さんで合意できる指標というのは簡単にはありません。8割が合意していても、あとの2割は先生方の好みが出てきます。それでいいのだと思います。違っているからこそ、教育の中で、例えば市民性とは一体どうことなのかという理解が深まっていくでしょう (Slide 18)。

C 京大

ご質問： 「市民性」一つをとっても

- それは学校で、職場で、生活の場で、どういう姿が見られることなのか？
- 質問紙上の項目や論文を書くためだけの話にとどめずに
- 現実の文脈の中で生きていくために役立つ「指標」として同輩と共有・吟味し、後輩に語り継いでいきたい

Slide 18

例えば水落さんがおっしゃった、環境問題や外国人との付き合いを一人一人がどう考えていかなければいけないかという話や、林さんがおっしゃった、世界というのは問題だけでなく、そこに自分もインパクトを与えていかないといけないという話は、市民性の具体的なありようだと思います。ただ、「おばあちゃんファッション」という卒業研究のタイトルを聞くだけだと、おばあちゃんファッションの裏で世界の問題を変えていこうとする市民性が育っているとは誰も思いません。つまり、先ほど辰巳さんがおっしゃった内的経験を、データからどう読み取るかです。そう考えると、冒頭のSlide 2のようになんかあるデータの中に込められた「意味」を理解する必要が見えてきます。それが見えれば、一人一人が小・中・高の12年間、そして社会人になっても、その意味を芋づる式に引っ張りながらたくさんの学びを得ることができるのではないかと思います。

今日もう一つ強烈に感じたのは、附属学校での学びは、直接キャリアに役に立つというよりも、皆さんが人生の曲がり角に立ったときに、自分は何を学んできたのかを自覚し、そこから人生を歩み直すときのリソースの役割を担っているのだということです。そう考えると、パネル調査の成果は非常に大きなリソースになります。つまり、パネル調査というのは、一人一人について学術的にデータを取ってまとめるのではなく、一人一人の卒業生に戻っていくだけでもなく、その人たちが語り合い、市民性とはどういうもので、どういう教育を受けてどういう仕

事をしていて、次は私はこういうことをしたいという学び合いにつなげていけるといいのではないかと思います。その意味では、パネル調査とこのシンポジウムのセット自体が、皆さんが学び続けて粘り強く働ける契機になっていくのではないのでしょうか。



○飯窪真也・齊藤萌木・白水始
編著『主体的・対話的で深い学び』を実現する知識構成型ジグソー法による数学授業』明治図書

○飯窪真也・齊藤萌木・白水始
編著『主体的・対話的で深い学び』を実現する知識構成型ジグソー法による中学校国語授業』明治図書

○三宅なほみ・東京大学
CoREF・河合塾編著『協調学習
とは— 対話を通して理解を深
めるアクティブラーニング型授
業』北大路書房

○三宅芳雄・白水始編著『教育
心理学特論』放送大学出版会



学ぶとは、
人とかわり合いながら
賢さを育て続けること

CoREFのホームページにいろいろ情報があります。ご参照頂ければ幸いです
<http://coref.u-tokyo.ac.jp/>

討論

(白水) 話題提供者の方には、パネル調査の成果を附属学校に戻していくために今後どうしていきたいかということをご意見いただければと思います。副校長には、パネル調査はこういうふうに使えという話を頂ければと思います。卒業生の方には、何々性の一つ身に付けるとしたら、自分は何がいいかということ、具体例とともに教えていただければと思います。

(天井) ご質問は、パネル調査の結果をどのように現場に返していきたいと考えているかということだったと思います。私の方からは暫定的に3点あります。一つ目は、数だけではなく、一人一人に着目した質的なデータを取り、実際にどういう方が探究的な学びの効果をより上げているのか、もしくは、こういう人にはこういう学びが必要だというような、やり方をもう少しケアできるような示唆が与えられたら素晴らしいことではないかと思います。

二つ目は、在校生のパネル調査と連結した縦断的なデータ分析です。白水先生からもご指摘があったように、パネル調査の結果を返すだけだと、こういうデータがありましたという報告にすぎなくなってしまいます。元々どういう特徴を持っていた人がどうなっていくのか、それにはどういう先生とのインタラクションや学びの実績があったのかをもう少し詳しく見ていく必要があるだろうと思います。

三つ目は、少し質問からずれた提案になってしまいかと思いますが、附属の卒業生の方々が自分たちの学びに意味付けをしていくということです。私の調査の中で、本当は70歳までの方は皆さん特別学習を経験しているはずなのに、その認識に相違があり、さらには、その取り組みの熱心さにも差があることが分かったことから、経験したことをどれだけさまざまな時点の中でメタ認知できるか、もしくは経験したことにどのような意味付けができるかが大切だと思います。こういう研究をしてこういう結果が

分かったというだけでなく、その過程の中で何を得たか、どういう自分の弱点や強みに気付いたかということ、卒業生と在校生がお互いに共有しながらメタ認知できる機会があれば素晴らしいのではないかと思います。

(村野) もう一人の副校長の村野と申します。今日の研究発表は、われわれにとって大変有益なものになりました。私が7年前に本校に赴任したときには協働学習はもう導入されていたのですが、今日の卒業生の発表の中には協働学習という話題はあまり出てこなくて、主に出てきたのは課題別学習や卒業研究だったことがすごく印象に残りました。つまり、東大附属としてはずっと協働学習を行ってきたのですが、卒業生にとってはそれはあくまでも一つの学びのスタイルであり、そこで育つものはもちろんたくさんあるのですが、かなりのインパクトを与えているのは課題別学習や卒業研究であるということです。

そうすると、われわれとしては、主体的・探究的な学びといったときの主体的な学びとは何なのか、探究的な学びとは何なのか、なぜそれが課題別学習や卒業研究で育つのかをもう少しクリアにすることが、他の学校現場に対して有益な情報を提供していく上でも大事だということがよく分かりました。大変有益な研究発表だったと思います。ありがとうございました。

(水落) 探究性、協働性、市民性の育成がいかにして可能かというところでいくと、私自身は、協働性ということに関してはあまり意識したことがなかったのですが、結果的には協働性が養われるような教育を受けてきたのだなと思っています。ただ、私はこの中で一番重要なのは市民性ではないかと思っています。やはり人間は一人では生きていけません。社会の中で何かしらの役割を演じて生きていくわけですが、その中で東大附属というのはすごく自由な学校で、自分の意見、やり方、全てを自分で考える

ことができます。ただ、それは自分勝手ではいけません。他の人たちとの関わりの中で自分らしさをどう出していくか、自分のやりたいことをどう主張していくかが重要だと思います。これから若い人たちが育っていく中で、特に市民性を養うということを重要視していただけると、とてもよい学校になるのではないかと思います。

(白水) 恐らく、卒業研究というのは手掛かりでしかないのだと思います。子どもたちが課題を決めて自分で追究するというのを学校全体がルールにした途端、その人を考える主体と見ざるを得なくなります。あなたは考える主体として生きていけるのだというスタンスで教育をしていくと、それがその人の人生につながっていきます。一人一人がそういうふう成長していくと、将来、国を支える市民としてとても大きな存在になっていくのではないかと思います。このプロジェクトもそういうところに向かって進んでいくのではないかと期待を非常に大きくしました。

(山本義春) 昨年度から附属学校のパネル調査のデータは、附属の先生方がご自身の教科授業の効果測定に使いたいというときに、リクエストしていただければ出せる形になっています。ただ、現在はパネル調査のアウトプットだけがアーカイブされている状態です。どういう取り組みをしたときにはどういうアウトプットが出るかということ自体のデータベースができると、アクションリサーチにつながりやすいのではないかと思います。ただ、先生方がご自身のインプットを用意するのは大変なことだと思いますが、そういうこともあるのではないかと思います。

(Q1) 附属学校で教員をしている者です。そもそも、本校の取り組みの全てに共通するのは、自己を見つめること、自分の立ち位置を見つけられるということだと思います。総合学習入門もそうですし、

課題別学習もそうですし、協働学習も含めて、自分の得意なことを見つけることで今後の生き方が見えてくるというのが、本校のカリキュラムの底に流れている部分ではないかと考えています。ですから、パネル調査では、個人がどのように変遷していくのかを見ていけるといいのではないかと思います。

学びというのは、線形的に積み上がってできていくだけではなく、時には下がっていく部分があります。その中で、どのような変遷を経ていくのか。偶然にも、今年度に私が卒業研究を担当した生徒が、附属の学校でどのような資質・能力が身に付くのかという研究をしていました。結論としては、他者とうまく関わる力、協調性が身に付くだけでも、本人の意識としては、自分はそういう力が伸びていないのではないかと言っていました。ですから、パネル調査の主観的な評価と、さまざまな客観的なデータを見比べて、むしろ全体的に上がっているからこそ自己評価が下がってきているということの指標づくりにパネル調査の成果を使えるのではないかと考えています。

閉会挨拶

中村 高康 (CASEER センター長・教育学研究科教授)

本日は、お休みのところ、またお忙しいところを多くの方々にお集まりいただき、誠にありがとうございました。

形式的な挨拶をしようかと思っていたのですが、皆さまの話を伺って触発されてしまったので、一言感想めいたことを申し上げて閉会のご挨拶とさせていただきます。

まず、東大附属の卒業生の皆さまの話ですが、大変興味深く聞かせていただきました。これまでの教育やキャリアを振り返りながら、附属の教育がそこにどうつながっているかを具体的に伺うことができたことは本当に貴重な経験でしたし、実際にそういう傾向があるのではないかというデータも出ていて、非常に有益な話だったと思います。一方で、データ分析の観点からは、附属の実践が丸ごと全部良くてその他は駄目というような話には簡単にはいかないわけで、科学的な分析を進めていかなければいけないと思います。

天井先生の報告にあった、特別学習の経験の有無ではなく取り組みの熱心度に結構影響力があったという話は、いろいろと考えさせられるところがありました。熱心度を上げていく努力をすべきなのか、あるいは他の部分に力を入れて実践を改善していくのかというような示唆もあったかもしれません。それから、世代の比較などの条件を検討することも必要な作業かもしれません。

そのような形で、今日のシンポジウムでは、私自身、効果検証の価値を改めて見いだすことができたと思っています。白水先生からはアクションリサーチという宿題を頂き、辰巳先生からは今後の研究のご提案を頂きました。これは実際にやるとなると大変なので、一步一步できるところから進めていかなければならないと思います。データを少しずつ積み上げて、附属の有益かつ実践的な価値を再評価し、それを現場に返せるところは返し、データ検証した

上でもなお残る価値を一般化して他の学校でも応用していただけるような形に持っていくことが理想ではないかと思っており、今後も当センターとしても頑張らなければいけない思いを新たにしました。

簡単ではありますが、以上で閉会のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

シンポジウム

主体的・探究的な学びの体験が育むライフキャリア

—東大附属中等教育学校での学びの実践—

報告書

発行者：東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

(編集担当：福留東土、川本哲也、上野雄己、天井響子)

発行者連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院教育学研究科赤門総合研究棟 A212

c-kouka@p.u-tokyo.ac.jp

発行日：2020年3月31日

東京大学大学院 教育学研究科附属
学校教育高度化・効果検証センター

